

# 第1章

## 5 領域研究会



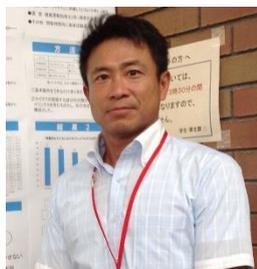
# 健康研究会

## ○日程と内容

6月9日(木)	健康研究会の経過と基本講義。次回からの進め方について
7月14日(木)	グループワーク
8月4日(木)	Zoomによる研究会(講師による動画を中心に)
9月1日(木)	グループワーク
11月10日(木)	事例報告・まとめ

## ○講師の紹介

村田トオル 氏



大阪青山大学部教育学部子ども教育学科 教授 健康運動指導士

研究分野：発育発達、スポーツ運動学、健康科学

研究テーマ：幼年期における運動遊びが社会的心理におよぼす効果



## 第1節 はじめに～長引くコロナ禍で子どもに起きていること

コロナ禍の中、教育保育の質向上をめざす本研究会は3年目となりました。参加の先生方はその都度入れ替えがあったものの、研究会講師として内容を積み上げる役割を務めてきました。

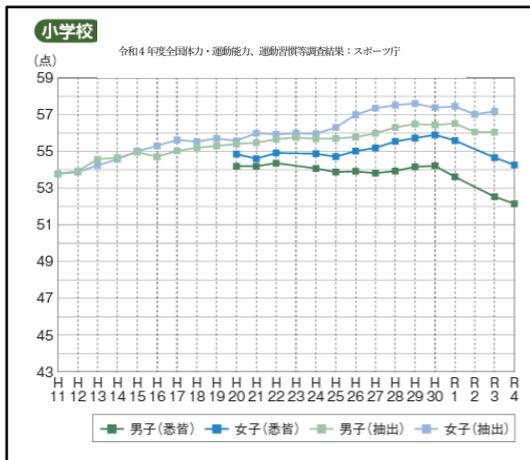


新型コロナウイルスの感染拡大防止として、密集・密閉・密接の【3密】をできる限り避けなければならない菌がゆさをきつと多くの先生たちが感じています。さらには、行動制限があるため「動くこと」という幼児の本能的欲求行動が抑えられてしまいました。この動くこと、すなわち運動は、栄養・休養と並び【健康づくり】には欠かせない3要素の一翼を担っています。ここでいう運動とは、体育やスポーツを指しているのではなく、子どもにとっては身体活

動を伴う【運動遊び】です。

さて、ここで仮にコロナ禍の期間の終わりが見えていたならどうでしょうか？感染防止のためにいろいろな制限事項があったとしてもなんとか乗り切れるかもしれません。しかしながら、もう3年となり、少しは落ち着きを見せていますが、様々なかたちで悪い影響が出てきました。その一つが子どもの体力低下です。

スポーツ庁によればコロナ禍となった令和2年以降連続して、大幅に体力が低下してきていたことが判明しています。



子どもの体力は、日頃から思い切り体を動かせることと密接な関係があります。体力が低下する傾向が続けばやがて、体を動かせることが億劫となり、さらに悪循環となります。

原因は、①運動時間の減少②学習以外のスクリーンタイムの増加③肥満である児童生徒の増加とされており、いずれもコロナ禍に起因することです。

今子どもの健康に関することで問題となっているのは、身体活動量の減少による<メタボリックシンドローム>、体を思い切り動かせる遊びの機会減少による<ロコモティブシンドローム>です。これらはコロナ禍以前より指摘されていましたが、さらに拍車がかかってきたのです。

また体力低下だけにとどまらず、心への悪影響も問題視されています。国立成育医療研究センターによれば、幼児で向社会性や友達関係等で支援の必要がある子は20~40%とされています。これではコロナ収束後に日常生活が落ち着きを取り戻したとはいえ、子どもの育ちに大きな課題が残ります。

保育現場ではコロナ禍になってしばらくの間は、できる限り3密を避けた活動をされてきましたが、先に述べたように子どもの心と体への悪影響が懸念されてきてからは、可能な限り感染防止策を講じたうえで運動遊びも少しずつ再開されています。

こうしてみれば、コロナ禍という人類史上未曾有の危機を通じて、人間の根幹ともいえる健康の重要性(とりわけ運動)がクローズアップされてきたのです。

## 第2節 研究会の方向性

これまでに述べてきたように、長引くコロナ禍で子どもの心と体の健康が脅かされており、このままだと将来に大きな課題を残すことにもなりかねません。すぐにでも手立てや対策を講じたいところですが、問題があまりにも大きく、状況を改善するにはたいへんな労力を要するのではないかと考えがちです。しかしながら、すぐにでも打破できる場所があるのです。

**どこで保証するのか？**

- ☆「設定保育」という時間
- ☆「園(所)」という場所
- ☆「園児・クラス」という仲間
- ☆「幼稚園教諭・保育士」という専門職

それは子どもたちが集まる施設、そうです、幼稚園、保育園(所)、こども園なのです。ここには、設定保育というあらかじめ計画された時間があり、園庭や保育室という動き回れる場所があり、クラスという多くの仲間がいて、さらに幼稚園教諭、保育教諭、保育士という子どもの健やかな育ちを願う国家資格を持つ専門職がいるのです。私はこれまで述べ50園あまりの園内研修会講師や、教育委員会等主催の保育者セミナー講師を務めてきました。

参加の先生方と直接お話をしたことを通じて感じたことが大きく2点あります。

・保育の展開がなされていない

具体的には、子どもが遊び込める工夫や多様な動きを引き出す工夫がなされていないことに加えて、運動遊びそのもののねらいが定まっていないうように感じます。そのため、子どもからの明らかな興味を示さない行動が見られたとしても、最初に提供した内容を半ば強制的に続けている場面が見受けられることがあります。

・運動遊びが特別な活動と捉えられている

保育における運動遊びが、他の設定保育内容とは一線を画され、なにか特別な活動と捉えられているように推察されます。そのため、子ども側に主体性がなく、保育者主導型の一方通行の活動が多いようです。

運動は健康づくりを担う重要な活動です。大人は何か達成したい目標があれば、少々乗り気ではなかったり、体が疲れていても、なんとか行動します。例えば、仕事で疲れていても、ダイエットのためにジムに行き運動をしたりします。ところが子どもはそうではありません。

### 遊びとなる3つの条件

(山田, 1994)

- ① 楽しいこと
- ② 活動自体が目的であること
- ③ 強制されているという感じを持たないこと



このようなことから、1回目には左表のように、子どもにとっての遊びについて再確認をしました。この3つが揃う時は、きっと子どもがキラキラ輝いていることでしょう。保育者としていつもこの場面であってほしいと思いますが、実はこの場面は、どこの園でも一日1回はあるはずで、自由遊びの時間です。

また現場の先生方が遊びの提供と体力の向上の関係性に懐疑的にならないよう下表を用い、理解を深めるようにし

ました。

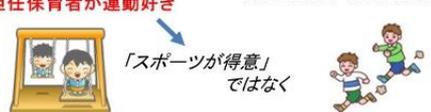
特に強調した点は「担任保育者が運動好き」という要素です。つまり、スポーツはあまり得意ではないけれど、子どもと一緒に遊んで遊びに溶け込んでいる姿が強く子どもたちへ好影響を及ぼすのです。

※運動能力が高い子とは、「すばしっこい子」に置き換えてもらえれば理解しやすいかと考えます。

#### 幼児運動能力テストとアンケートの結果から

(杉原, 2007)

運動能力が高い子の傾向	運動能力の優劣に関係ないもの
・自由時間では、 屋外で遊んでいる	・園庭の広さ
・よく遊ぶ友達の数が多い	・園にある施設用具の種類の数
・担任保育者が運動好き	・保育時間内の体育指導



今回の研究会の進行で重点を置いたのは、これまで2回の積み重ねから次の3点です。

- ① グループで立てた指導内容を発展させ、自園で実践する。
- ② 他園の保育者の模擬保育を体験することで、自分の保育の振り返りとする。
- ③ 子どもの意欲を引き出すには保育者の関り方がとても重要な役割を果たしていることを再認識する。

以上のことから、2回目以降の進行は実践中心といたしました。



写真上：模擬保育

写真下：ディスカッション



### 第3節 実践事例から見てきたもの

5回目にはこれまでのまとめとして、各園での事例を持ち寄り、それについてグループ内でディスカッションしました。

意見交換の中心はつぎの4つです。毎回実践記録の持ち寄りをしてきましたので、これまでになく具体的に奥深い分析がなされました。

- ①子どもの心情
- ②保育者の関り方（試みたがうまくいかなかった点）
- ③保育者の関り方（工夫した点）
- ④実践から保育者の気づきや学んだこと

#### 事例1 5歳児

##### 主な活動（遊びの名前）

- ・一本道じゃんけん

両端からスタートして、出会った地点でじゃんけんをし、勝てばそのまま進み、負ければ戻り、次の子がスタートする。勝敗は相手のボールを取った方が勝ちとなる。

### 環境構成（遊びの内容）



### 遊びのねらい

- ・バランスをとりながら体を動かせる楽しさを味わう
- ・ルールのある遊びをみんなで楽しむ

#### ① 子どもの心情

- ・ちょっとかわい ・落ちたくない ・勝ちたい ・早く行きたい ・自分の順番が回ってきてほしい
- ・なんかワクワクする ・ルール守らないと

#### ② 保育者の関り方（試みたがうまくいかなかった点）

- ・ルールが伝わっていない ・勝敗がなかなかつかない

#### ③ 保育者の関り方（工夫した点）

- ・実際に行いながら説明をした ・遊具を追加した

#### ④ 実践から保育者の気づきや学んだこと

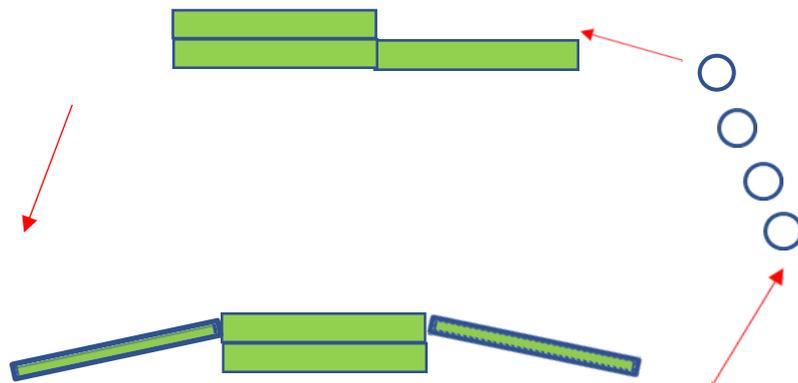
- ・バランスのとり方がそれぞれ違う ・速くできる方法を子どもなりに考えている
- ・ルールの抜け道を子どもなりに考えている ・道が長いと勝敗がつきにくい

## 事例2 1歳児

### 主な活動（遊びの名前）

- ・サーキット

### 環境構成



### 遊びのねらい

- ・全身をつかって体を動かせる楽しさを味わう
- ・自分のペースで両足跳びに挑戦する

① 子どもの心情

- ・安心できる室内での遊び
- ・坂道で浮遊感を味わう
- ・大好きなピョン

② 保育者の関り方（試みたがうまくいかなかった点）

- ・フープは順番を待ちきれずに、友達を抜かす
- ・フープを持って行ってしまう

③ 保育者の関り方（工夫した点）

- ・フープを2列にして、両足跳び（パー）で跳ぶようにすると②が解消された

④ 実践から保育者の気づきや学んだこと

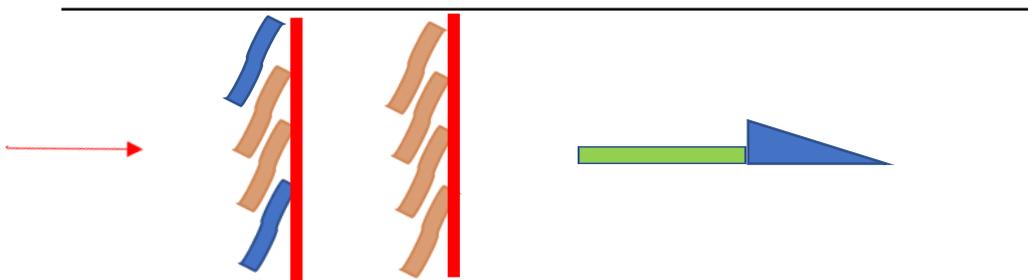
- ・いきなり園庭で活動を行うのではなく、普段の生活の場（慣れた部屋）で、まず遊ぶ
- ・くりかえして行くうちに、自分でバランスをとったり、ジャンプで膝を曲げたりするようになる

事例3 0歳児

主な活動

- ・ハイハイですずらんテープ(以下ポリエチレンテープと称す)のトンネルくぐり

環境構成



遊びのねらい

- ・全身をつかって体を動かせる楽しさを味わう
- ・自分のペースで両足跳びに挑戦する

① 子どもの心情

- ・ポリエチレンテープの向こうに何があるのかな
- ・ちょっと怖い、でもおもしろそう
- ・ポリエチレンテープがシャカシャカ鳴るのがおもしろい

② 保育者の関り方（試みたがうまくいかなかった点）

- ・慣れない遊びなので、必ず保育士が坂道マットの横にいる

③ 保育者の関り方（工夫した点）

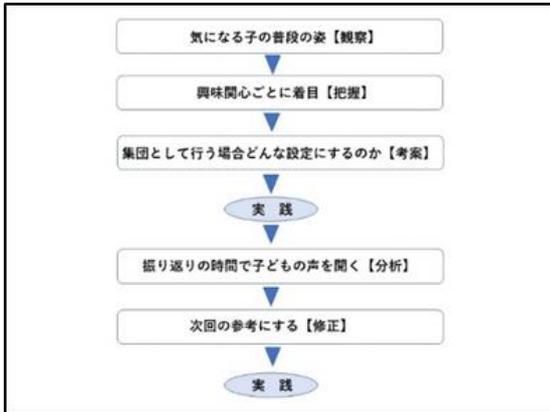
- ・ハイハイが苦手な子に対し、みんなで応援するよう促す
- ・先が少し見えるように、テープの間隔をあける
- ・「この先に何かあるよ」と事前に話した

④ 実践から保育者の気づきや学んだこと

- ・繰り返すことで動きがスムーズになってきた
- ・言葉はなくても応援する気持ちを出すことができる
- ・0歳児であっても、友達の存在を意識している

このように視点が具体化すると、保育者として自分の取るべき行動が明確になってきます。子どもの遊びを観察する際には、漠然とではなく、明確な視点を持つことが大切ということが実践から理解されました。

#### 第4節 PDCA サイクルを進めるために



「10の姿」や小学校との接続からの視点については、他の領域研究会の報告を参照していただき、ここでは保育者と子どもの関係からの視点で、PDCA サイクルについて触れることにします。

子どもとの関係での PDCA サイクルの出発点はどこにあるのでしょうか？保育者の立ち位置は常に現場の最前線です。ともすれば当たり前の風景が広がるように思いがちですが、実は【園での普段の姿】に大きなヒントがあります。そして、一番わかるのは、保育者が介入しない自由遊びの時間

なのです。たとえば専門職として、明らかに動きがぎこちない、活動が消極的だとか、自分の気持ちがなかなか言えないという気になる子がいるとします。おそらく保育者間でも対応に関して共通認識があることでしょう。子どもへの最善の保育を提供しているはずなのに、どうしても効果があらわれないのも心の葛藤があることでしょう。一度、気になる子が自由遊びの時間にどのような遊びをしているのかを観察してみませんか？集団での活動は苦手なものの、自分のペースで遊べる時間には、意外に伸び伸びと動いているという場面があるかもしれません。そこに保育者としての新たな気づきがあります。「あの子が好きな遊びをクラスでするにはどんなルールにしたらいいだろうか？」と保育者としての腕の見せ所となります。

そして、気になる子の遊びからヒントを得て考案した遊びをぜひ実践してみましょう。また、遊びの振り返りの時間で子どもたちに感想を聞くのも今後の応用に必ず生かします。

こうしたサイクルを繰り返すことによって、保育者自身の遊びのバリエーションが増えるだけでなく、会議を通じて保育の方法の共通理解や提案につながります。個人のみならず園全体のバージョンアップにつながることを期待されます。

#### 第5節 ミドルリーダーとして研究成果を園にフィードバックするには

保育経験を積み重ねて来て、日々の保育活動に対しやりがいを感じておられることでしょう。ミドルリーダーとして園でその能力や経験値を発揮するには、折に触れて自身の保育を振り返るといいでしょう。

この研究会では、毎回指導案を作成し、その内容を実践するという進行を続けてきました。頭では自分が行う内容を十分理解できていて、しかも即実践、即対応できるのですが、「いざ文章に」となると戸惑いが

あったかだと思います。私にはとても苦い思い出があります。

私は20年の現場経験を経て大学院へ進学しました。ある日、論文がなかなか進まず悩んでいると、指導教官から「あなたは20年の指導経験があるので、そつなく子どもと接することができるでしょう。しかし、頭の中でわかっている、文章にできなければ、わかっていることと同じですよ。」ときついアドバイスを受けました。確かにそうでした。文章にしなくても、時間通りにプログラムをこなす、予想外のことも臨機応変の対応はできていました。しかし、子どもの笑顔を引き出すことはできても、なぜ引き出すことができるのかを、私自身がわかっていなかったのです。以来、毎回はむずかしいですが、気になる子の行動観察や子どもたちとのやり取りを文章として記録するようになりました。

今回、事例を記録するにあたり、とても時間がかかったことと思います。しかし、一度記録する習慣をつけられれば、折に触れて自分の保育の振り返りをすることができますね。文章化すれば、時には反省もあるでしょうが、子どもの成長を確かに感じることができ、同時に自分の保育方法に自信が持て、きっと保育のやりがいにつながることでしょう。ぜひ今後も続けてください。その姿はきっと若い世代の先生にも伝わります。

下記が研究会で使用した指導案や振り返りシートです。

現場の先生方が記入しやすいように項目を簡素化しておりますのでご活用ください。

<p>【 歳児】 令和 年 月 日実施</p> <p>A・B・C (○で囲む) グループ 園名 名前</p> <p><b>遊びのねらい</b></p> <div style="border: 1px solid black; height: 50px; width: 100%;"></div> <p><b>主な活動</b></p> <div style="border: 1px solid black; height: 50px; width: 100%;"></div> <p><b>環境構成 (遊びの方法)</b></p> <div style="border: 1px solid black; height: 100px; width: 100%;"></div> <p><b>含まれる基本動作</b> <b>準備物</b></p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"><div style="border: 1px solid black; width: 45%; height: 50px;"></div><div style="border: 1px solid black; width: 45%; height: 50px;"></div></div>	<p>令和 年 月 日</p> <p>A・B・C (○で囲む) グループ 園名 名前</p> <p><b>振り返り</b></p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"><p>・子どもの動き方で気づいたこと (遊んでみてどうでしたか?子どもたちの反応は?)</p></div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"><p>・その場で工夫したこと (クラスの子どもの実態を見て事前に変更したこと、途中で変更したことや付けだし、言葉かけの工夫など。)</p></div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px;"><p>・子どもの感想 (保育者の反省や評価、次回の「遊び」の時に工夫したいこと、こうすればよかったことなど。)</p></div>
---	--

資料 「健康研究会」 アンケートより

研究会・講師名
健康研究会 村田トオル先生

回収数
14

<研修効果>

経験年数	合計数	%
1年未満	0	0%
1～5年	6	43%
6～10年	3	21%
11～20年	4	29%
21年以上	1	7%

研修前		合計数	%	研修後		合計数	%
① 興味		5	3 21%	⑤ 内容理解		5	4 29%
		4	9 64%			4	7 50%
		3	2 14%			3	3 21%
		2	0 0%			2	0 0%
		1	0 0%			1	0 0%
		不明	0 0%			不明	0 0%
② 得意		5	0 0%	⑥ 応用力		5	4 29%
		4	3 21%			4	6 43%
		3	8 57%			3	3 21%
		2	3 21%			2	1 7%
		1	0 0%			1	0 0%
		不明	0 0%			不明	0 0%
③ 保育計画		5	0 0%	⑦ カリキュラム理解		5	1 7%
		4	5 36%			4	9 64%
		3	8 57%			3	2 14%
		2	1 7%			2	2 14%
		1	0 0%			1	0 0%
		不明	0 0%			不明	0 0%

学び・気づき

- ・0歳児クラスという事もあり、日々の生活の中で意識的に取り組むという感じではなく、自然と楽しく取り組みめた。
- ・講師の動画やグループトークを通して、他園の実情を知れたり運動遊びの幅が広がった。
- ・運動遊びのいろいろなアイデアを教えてもらったことで、1歳児の体づくりにつながる遊びを考えられることができた。また今後、幼児を担当したときにやってみたい遊びを知ることができた。
- ・体幹を鍛えるためには、不安定な環境を作ることで楽しく遊べるということを学んだ。また少人数で取り組む方法だと、同じ内容でも安全に、また一人一人と言葉を交わしながらできることを学んだ。
- ・浮遊感のキーワードが学びになった。
- ・子ども自身で選択できるようにすることを心がけるようになった。
- ・日々、保育の中で実践していることを持ち寄り発表する中で、内容を深めることができた。
- ・運動遊びの展開の幅が広がった。用具がなくても何でも運動遊びにつながるんだと感じた。
- ・子どもに“させる”のではなく、“楽しんで”やりたいと思えるように工夫するようになった。
- ・あそびの中であまりルールを伝えず実践した方がケガが少ないと聞き、今まで説明が多かったと反省したので、これからの遊びで生かしていきたい。

園内への普及

- ・学んだ実践を園に持ち帰りやってみたり、アレンジを加えて実践した。担任間で情報共有にもつながった。
- ・研究会で得た知識を実践に活かし、フォトニュースにまとめて普及していきたい。
- ・学んだことを園の会議で報告して伝えている。
- ・研究会で計画した遊びを子どもになって経験したり子どもの視点で考えることで、活動の見直し力がつく。自園でも振り返りの大切さについて話し合っていたので生かすことができた。

# 人間関係研究会

## ○日程と内容

6月3日（金）	人間関係研究会の経過と基本講義。次回からの進め方について
7月1日（金）	講義とグループワーク
10月21日（金）	グループワーク
11月25日（金）	グループワーク
12月23日（金）	グループワークの発表・まとめ

## ○講師の紹介



卜田真一郎 氏

常磐会短期大学幼児教育科教授

専門は保育方法学、乳幼児期の人権教育、人間関係論

## 第1節 研究会のねらい・研究会のもち方

2022年度の「人間関係」研究会では、2021年度に引き続き、「活動分析」に取り組む中で、遊びがどのように発展していくのか、そして、その中で人間関係がどのように育っていくのかを見通すためのワークに取り組みました。

### 1、「子ども理解→ねらい→内容→保育者の関わり」

子どもたちの豊かな育ちのために、保育の見通しを立てることは、保育者の重要な役割の1つであることは言うまでもありません。その際、「子ども理解→ねらい→保育内容→保育者の関わり」の一連の流れを見通すことが重要になります。人間関係の育ちを見通すという観点から考えても、この一連の流れを踏まえることは基本になります。

「子どもの現実から保育は始まる」の言葉に示されるように、すべての保育実践は、子どもの姿の理解に始まります。「この園の子どもたちにはこのような特徴がある」「クラスの子どもたちはこのような姿がある」「○○ちゃんの育ちの現状はこのような特徴がある」といったさまざまなレベルからの子どもの姿の理解が、保育の計画と実践の出発点になります。そうした子どもの姿の理解に基づいて保育者

は、「こんな遊びを楽しめるようになって欲しい」「こんな仲間関係になって欲しい」「こんな生活の力を獲得して欲しい」と「ねらい」を明らかにしていきます。次に、この「ねらい」をどのような保育内容（遊びや生活）を通して実現するかを考えていきます。さらに、その保育内容の中でねらいを確実に達成するためにどのような保育者の関わりを行うのかを考えていきます。この時、「直接的な関わり」としての指導・援助と、「間接的な関わり」である環境構成の双方を考えていくこととなります。こうした見通しの上で実践が行われていきますが、実践を通して（あるいは実践の後の振り返りのプロセスの中で）保育者は子どもの姿を理解していきます。こうして「子ども理解→ねらい→保育内容→保育者の関わり」のプロセスが繰り返されていきます。

こうした一連のプロセスにおいて、「ねらいを達成するためにどのような活動がふさわしいのか」を考えることは保育の計画を立てる上での重要課題であると同時に、難しさを感じる点でもあります。保育は「活動」を通して経験を積み上げていくことを基本とした営みであることから考えれば、「ねらい→内容」のプロセスの判断のためには、活動の内容を深く理解することが必須となります。以下で、「活動の理解」について、その必要性と視点について考えてみましょう。

## 2. 指導計画作成の前提となる「活動の理解」

### （1）活動の理解の必要性

遊びは「心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習」であるといわれます。遊びを通して子どもたちは発達に必要な経験を積み重ねていきます。近年、保幼小の接続や質の高い幼児教育の実現が求められる中で、「遊びの中の学び」はこれまで以上にクローズアップされ、それぞれの遊びの中で、子どもたちがどのような学びを実現しているのかを読み取ることが保育者に求められています。

しかし、子ども自身は発達に必要な経験をすることを目的として遊んでいるわけではありません。「面白いから」「楽しいから」遊んでいるのです。活動には、活動の主体である子ども自身の「活動目的」があります。教育の側面から考えれば、活動を通して発達に必要な経験が積み上げられていくことが目標となりますが、子どもにとっては活動目的の実現が目標となります。遊びの場合、「面白さの追求」が主たる活動目的であり、遊びの面白さを追求した結果、さまざまな学びがもたらされます。保育者は、この原則をしっかりと意識し、「活動目的」と「その結果としてもたらされる学び」を理解しておく必要があります。

また、活動を「点」としてではなく、「線」として理解することも重要です。活動を「線」として捉えるということは、その活動が乳児期から幼児期の終わりに向けて、どのように発展していくのかという、活動の質的発展の流れを捉えるということです。こうした活動の質的発展の流れを理解しておくことで、指導計画作成において、長期的な活動の発展を見通すことが可能になります。また、子ども理解においても、子どもたちの活動の発展の「現在地」を把握することが可能になります。

### （2）活動理解の3つの視点

このように考えれば、活動内容の理解にあたっては、「子ども自身の活動目的」と「活動を通して得られる経験」の双方を、活動の発達の流れの中で理解することが必要になります。「活動を通して得られる経験」には、認識に関わる側面と社会性や自我に関わる側面の2つがあると考えられますので、活動内容の理解にあたっては、「A. 子ども自身の活動目的となる『面白さ・楽しさ・喜び』」、「B. 活動を通して得られる認識面に関わる経験となる活動に必要な『知識・イメージ・技術』」、「C. 活動の中で得ら

れる社会性や自我に関わる経験となる『活動の中で経験できる関係性』の3点を意識する必要があります。

#### A. 面白さ・楽しさ・喜びの理解

子ども達がさまざまな活動（遊び・生活）に主体的に取り組むのは、その活動に興味や関心があり、面白さ・楽しさ・喜びを感じるからです。また、ある活動を行えば、自動的にその活動に特有の「面白さ・楽しさ・喜び」を味わえるわけではないので、活動の面白さ・楽しさ・喜びを獲得していくことは保育のねらいの中核となります。保育者には子ども達の興味や関心を積極的に引き出していく役割が求められますし、その役割を果たすために、保育者自身が活動の「面白さ」「楽しさ」「喜び」を理解しておく必要があります。活動に含まれる面白さ・楽しさ・喜びは、活動の発達に伴って変化していくものなので、面白さ・楽しさ・喜びを多様に掴んでいくことが求められます。

#### B. 知識・イメージ・技術の理解

活動が成立するためには、さまざまな知識・イメージ・技術が必要です。レストランごっこでお店の人になりきって遊んでいる子どもの頭の中には、「お店の人って、こんなことするねんで」「こんなものがあるねんで」「お客さんが入ってきたら、こんな風に言うねんで」というイメージが広がっているはずです。ごっこの対象になっている物・人・社会的現象などに対するイメージがごっこ遊びを支えています。子どもたちがごっこ遊びを、より豊かに、より楽しく遊ぶためには、保育の中で豊かな生活経験を保障し、遊びのもとになるイメージの世界を豊富にするような働きかけが必要になります。

また、活動が成立するためには、ハサミ・のこぎり・絵筆などの道具使用の技能、走る・跳ぶ・投げる・蹴るなどの身体的技能などが必要です。活動が成立するために必要な技能を明らかにし、その技能を身に付けられるような指導・援助を行うことによって、子どもたちの活動が豊かなものになっていきます。

こうした知識・イメージ・技能は、遊びを通して子どもたちが獲得していく力で、活動の中で「育つもの」であるとも考えられます。活動分析を通じて、その活動を通して子どもたちがどのような「学び」を実現し得るのかを明らかにすることができます。

#### C. 関係性の理解

活動の中で、子ども達はさまざまな形で人との関係を取り結び、人とかかわる力を育てていきます。子ども達が豊かな関係力を育むためには、その活動の中で子ども達がどのような人との関わりを体験できるのか、しているのかを掴み、適切に指導や援助を行うことが求められます。

活動の中での人との関わりを捉えるために、「その活動には、どのような人との関わりが含まれているのか？（活動が求める関係性）」と「その活動に、どのような人との関わりが含ませうるのか？（活動に含みうる関係性）」の視点から考えてみることは重要です。

ごっこ遊びの場合、「(土で作ったプリンを差し出して) プリンどうぞ!」「ありがとう、いただきます!」などのやり取りのように、見立てやイメージを表現する—それを受容する、という関係性があることで遊びが成立します。また、役割分担などさまざまな関わりの中で遊びが進んでいきます。鬼ごっこの場合、「追う—追われる」という対立的な関係を作ることが求められますし、氷鬼などの場合、「友達に助けを求める」「凍っている友達を助ける」といった関わりが求められます。こうした活動に特有の

関係性を保育者が理解することにより「子どもたちにこのような関わりの力を育てたいから、この活動を選択しよう」という判断が可能になります。

今回の研究会では、遊びを通して「人間関係」を育てるために、遊びの中で経験できるさまざまな人との関わりを描出することを検討の柱としてきました。

### (3)「活動の発達」の視点から導き出される子ども理解の視点

このような分析や整理を行うことは、子ども理解を深めることにもつながっていきます。

「面白さ・楽しさ・喜び」の視点を持つことで、「一人ひとりの子どもが、どのような活動に興味や関心を持ち（あるいは持たず）、どのような面白さ・楽しさ・喜びを感じているのか（あるいは、感じられていないのか）」を把握することが可能になります。同じ活動に取り組んでいても、子どもたちが感じている面白さ・楽しさ・喜びはその子によって異なります。活動分析の結果を踏まえながら、一人ひとりの子どもたちが感じている面白さ・楽しさ・喜びの現在地を把握することで、保育の方向性も明らかになってきます。

「知識・イメージ・技術」の視点を持つことは、活動の前提となる知識やイメージをどのように持っているか（例えば、ごっこ遊びの前提となるレストランについてのイメージをどのように持っているか、集団ゲームのルールをどの程度理解しているか、など）、活動に必要な技術をどのように獲得しているか（例えば、はさみはどの程度使えるのか、掃除道具をどの程度使えるのか、など）を理解することを可能にします。この視点から子どもの姿を理解することで、活動の中で何が育っているのかを理解することができますし、遊びの面白さ・楽しさ・喜びが豊かにならない理由が見えてくる場合もあります。

「関係性」の視点を持つことは、活動の中でどのようにコミュニケーションを取っているのか（「社会的スキル」の育ち）、その背後にある自己認識（その子自身の自分への見方、自尊感情・自信のありよう）や他者認識（その子のことを周囲の子どもはどのように見ているのか、肯定的か、否定的か、など）の現状、人権感覚や道徳性の育ちの現状を捉えることに繋がります。特にこの時、「この活動の中で見られる関係性」という視点から具体的に子どもの姿を理解することによって、活動の中でどのような関係性を育てていくのかが明確になります。

このように、活動分析の視点と一貫した視点からの子ども理解を行うことで、保育の見通しは明確になります。また、「ねらい」「保育内容の決定」「保育者の指導・援助」についても、この3つの視点から検討することによって、保育の見通しはより明確で具体的なものとなります。

## 3、研究会の学びと持ち方

今回の研究会では、遊びを大きく3つに捉え、グループに分かれてその発展の道筋を考えていきました。

- ・ **ごっこ遊び**→その名の通り、ごっこ遊び全般がここに含まれます。
- ・ **活動的な遊び**→身体を動かす遊び全般をここに含めます。固定遊具を使った遊びや、縄跳びなどの運動的な遊び、鬼ごっこなどの集団ゲーム（あるいはそれに繋がる遊び）がここに含まれます。
- ・ **探求的な遊び**→カードゲームやボードゲームなどの室内でのどちらかという静的なゲーム遊び、ブロックや積み木・パズルなどの遊び、砂場での山作りや泥団子作りをここに含めます。

遊びの発達を見通すとき、子どもにとっての遊びの意味の中核をなす「遊びの面白さ」の発展という視点をおさえておく必要があります。

それぞれの遊びのタイプによって、どのような面白さが基本になるのかを次のように捉えて整理していきました。

- ・ ごっこあそび→ごっこ遊びのおもしろさの基本は、何かに変身していくことです。動物になっていろいろな遊びをするというような遊びを原型として、いろいろな役割やテーマを付加していく遊びに展開していくという視点から、遊びの発展を見通していきました。
- ・ 活動的な遊び→基本は、身体を動かすことの楽しさや面白さです。初めは「単純にそれをするのが面白い（楽しむ面白さ）」がある遊びとしてスタートし、次第にその中に、「冒す（ためす）面白さ」、つまり、意図的に課題を作って遊ぶ面白さが加わり、それがルールとして形になっていく（つまり、ルールの中で、チャレンジをすることが楽しい、スリルを味わうことが楽しい面白さになっていく）という視点から、遊びの発展を見通していきました。
- ・ 探求的な遊び→ものを扱う面白さが基本となっています。原型としては、いじくり遊びや並べる遊びなど、ものを操作することを楽しむ遊びで、そこから、構成的な遊び（山作りや川作りなど、より意図的にものを操作する遊び）やボードゲームなど、ルールの中でのものを扱うことを楽しむ遊びへと発展していくという視点から、遊びの発展を見通していきました。

## 第2節 研究会で取り組んだ活動分析の成果

上記の考え方に基づいて、「ごっこ遊び」「活動的な遊び」「探求的な遊び」の3つのグループに分かれて活動を分析し、発展の道筋を描きだすワークに取り組みました。

各グループのメンバーは、園で実践している遊びとその中で子どもたちの姿を持ち寄り、その姿を交流することからワークをスタートしました。そして、共通する遊びのテーマを絞り込みながら、0歳児から5歳児に向けて、どのような遊びの姿があるのか、その中で、子どもたちはどのような面白さや喜びを感じているのか、どのような知識・イメージ・技術が必要とされているのか、そして、どのような人との関わりを経験しているのか、を整理していきました。

以下、各グループで取り組んだワークの成果について概観していきましょう。具体的には図を見ていただければと思いますが、各グループのまとめは下記のような柱から行われています。

### (1) 「ごっこ遊び」のグループ

0歳児から2歳児の担当の先生方のチームでしたので、ごっこ遊びが生まれる時期の遊びの発達を整理しています。特に、子どもたちの遊びにどのようにおとなが関わっていくのかという点から関係性を捉えて整理されている点に特徴があります。

### (2) 「活動的な遊び」のグループ

走る遊びやおいかけっこから鬼ごっこへの遊びの発展を捉えて整理をされています。鬼ごっこなどの遊びの場合、遊びの中に人との関わりが含まれているため、どのような遊び方なのか、その中でどのような面白さがあるのかを捉え、各時期での保育者の関わりを描出されています。

### (3) 「探求的な遊び」のグループ

ブロックなどの物を使った遊びを取り上げ、その中で起こってくるトラブルとその解決に焦点を当てて整理をされています。特に、保育者が一緒になって問題解決をする時期から子どもたちが自分たちで問題解決する時期への見通しを整理されている点に特徴があります。

それぞれの活動においてどのような関係性を育てうるのかを意識する機会としていただく機会となったのではないかと思います。私自身も、日常的に当たり前のように繰り返している遊びの中に豊かな経験が含まれていることを保育者が意識することの重要性を改めて感じる機会となりました。ぜひ、こうした現場の知恵の整理を通して、より豊かで質の高い実践に繋げていただければと願っております。

### 第3節 研究会の成果を園全体の保育の質的向上につなげる ～ミドルリーダーの役割として～

今回の研究会に参加いただいた先生方は、各園でのミドルリーダーとしての役割を担っておられる先生方でした。今回のグループワークも、一定の経験を積んでおられる先生方が集まっておられたからこそ、これまでのご経験をもとに、縦断的に遊びの発展を整理していただくことが可能になったのだと思います。若手の先生方にとっては、遊びがどのように発展していくのかという見通しを持つことはなかなか難しいことだと思われまます。また、園によって受け継がれてきている遊びの文化も異なるため、各園が大切にしている活動について、その発展についての見通しを共有することは重要になります。そうした意味で、ミドルリーダーの先生方が、各園の実践の蓄積に基づいた遊びの見通しを意識して、保育者間の共通理解の土台を形成することは、園の保育の質的向上のためにも重要なのです。



ごっこあそびの発展の道筋と保育者の関わり(0歳児から2歳児の遊びを見通す)

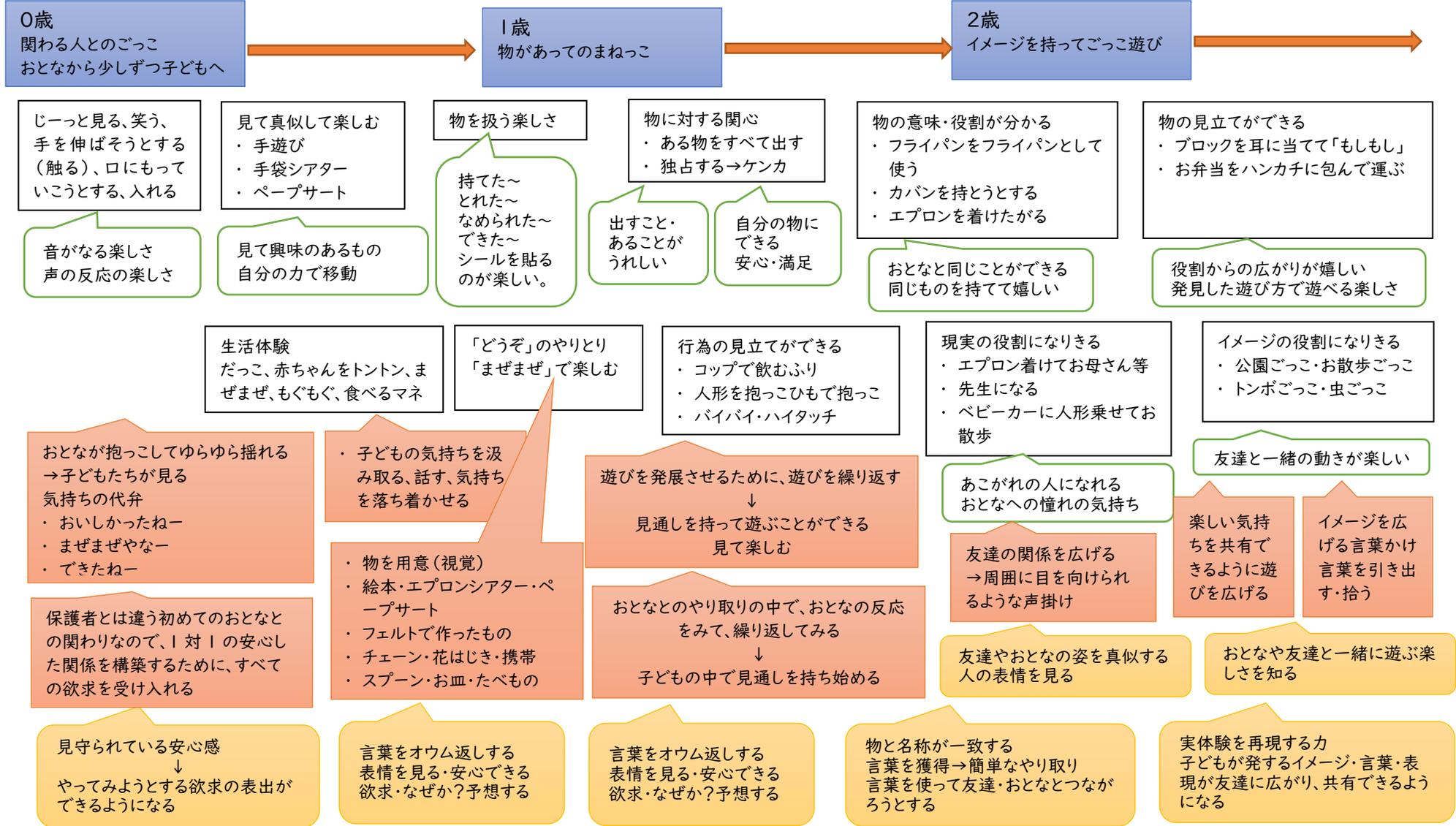
遊びの特徴

遊びの姿

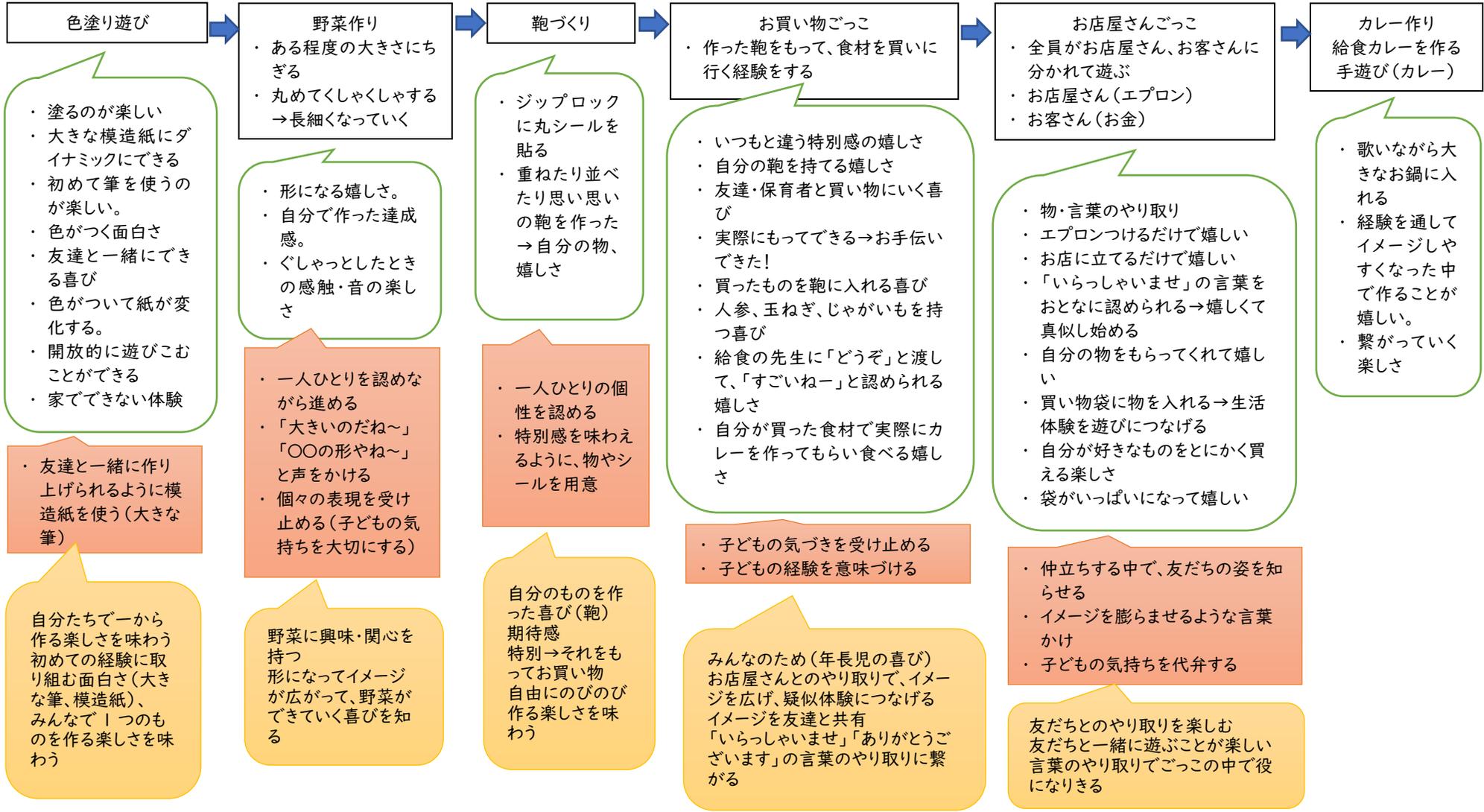
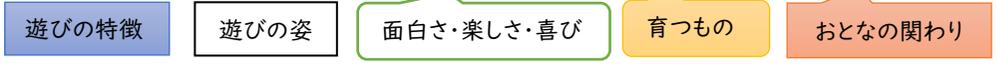
面白さ・楽しさ・喜び

育つもの

おとなの関わり

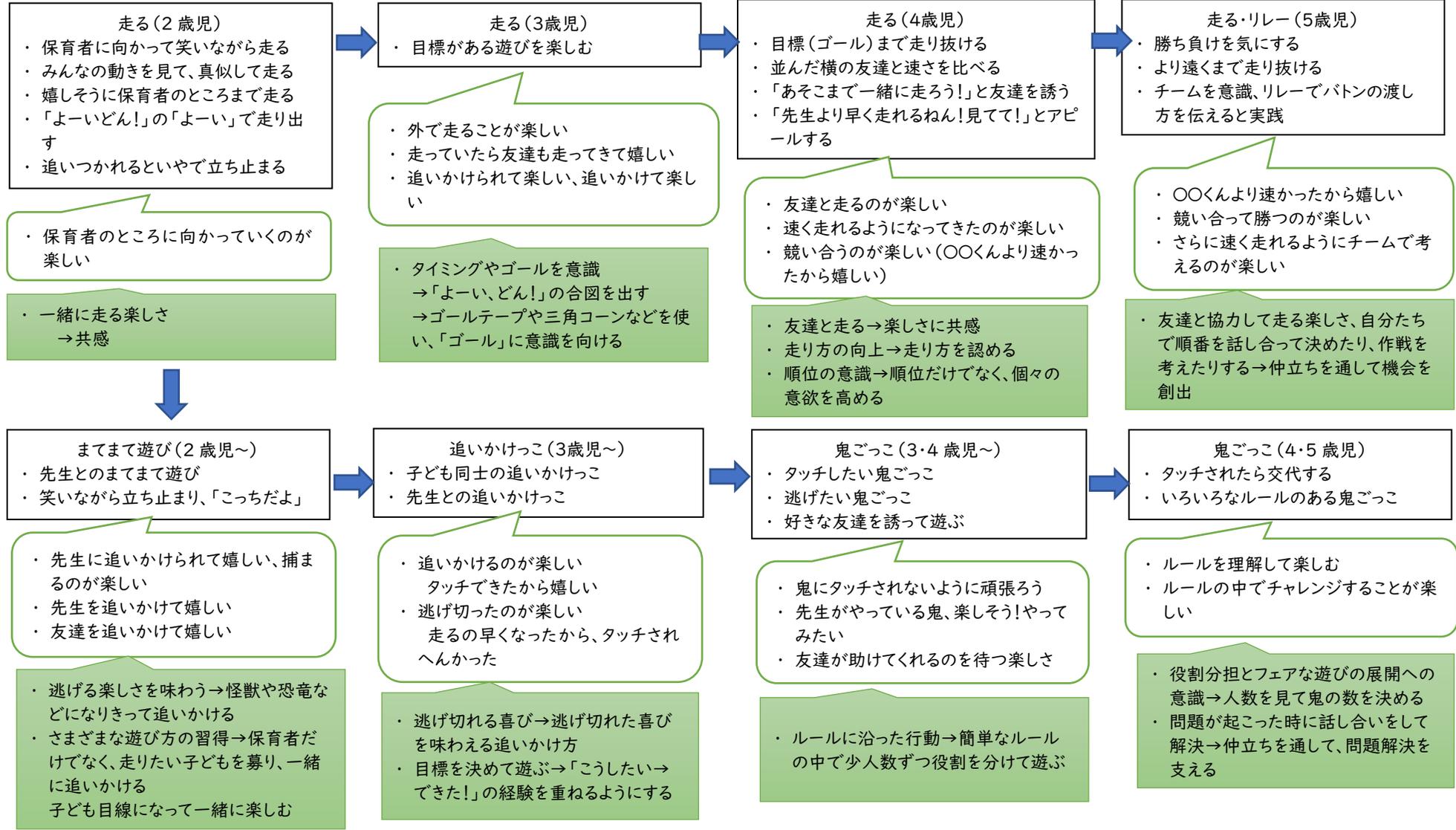


ごっこあそび(靴づくり・お買い物・カレー作り)の実践の道筋と保育者の関わり



活動的な遊び(走る・おいかけっこ～鬼ごっこ)の発展と保育者の関わり

遊びの姿      面白さ・楽しさ・喜び      育つもの→保育者の関わり



活動的な遊び(しっぽとり・さまざまな鬼ごっこ)の発展と保育者の関わり

遊びの姿      面白さ・楽しさ・喜び      育つもの→保育者の関わり

しっぽとり(保育者のみしっぽ)  
 ・保育者の腰にたくさんしっぽをつけて、子どもがしっぽを取りに来る

・保育者のしっぽをとるのが嬉しい  
 ・たくさん取れて嬉しい

・しっぽをつけることで、追いかける目標を視覚的にわかりやすくする  
 ・保育者も(他の保育者がつけている)しっぽを取りに行き、取る楽しさを伝える

・積み重ねの中でルールを知っていく。

・子どもにしっぽをつける→しっぽをつける子どもの人数を増やす  
 ・「取りに行く→追いかける」を多様に体験

しっぽとり  
 ・追いかける役・逃げる役に分かれる

・逃げ切れて嬉しい／取られて悲しい  
 ・捕まえないように逃げよう!  
 ・速く走れるように頑張る!  
 ・最後まで逃げ切った達成感

・しっぽをつける人とつけない人に分ける(役割を明確に)  
 ・しっぽを取られず逃げる、しっぽをとるために追いかける、という目的の明確化  
 ・帽子などで役割を意識

複雑なルールのしっぽとり  
 ・全員がしっぽをつけて、取る・逃げるを同時に実施  
 ・「しっぽ取られても気づかない」「逃げることだけに集中」から両方の楽しさへ

・いっぱいとりぞ!逃げ切るぞー!  
 ・取ったしっぽが増えるのが嬉しい

・ルールの理解を支える  
 ・子どもと話し合ってルールを決めていく

高オニ

・友達と一緒に鬼になれる。  
 ・高いところを探さない!

・協同性の育ち→言葉による伝えあい(ルールや役決めの話し合い)  
 ・ルールが難しい子には個別で伝える

オニさんオニさん誰ですか?

・オニになるのが嬉しい  
 ・最後まで逃げるのが面白い

・その子の名前を呼び、遊びの輪に誘う

氷オニ

・友達が助けに来てくれて嬉しい  
 ・全員タッチしよう!

・氷オニのルールの理解(捕まったら止まる・助けてもらったら逃げる)  
 →保育者が見本となったり、その都度伝える  
 ・助け合う関係  
 →自分が固まってみて、子どもが助ける機会を作る。「たすけてくれてありがとう～」など、子どもに聞こえるように  
 →子どもが自主的に動けるように、「助かった」「ありがとう」「次は助けるね」など伝える

色オニ

・色を探すのが楽しい  
 ・友達と走るのが楽しい

・周りを見る・探す・気づく  
 ・○○色、あんなところにある!  
 ・△△ちゃんの服にも!  
 →色の認識が弱い子どもわかるように、まずはわかりやすい色から  
 →ルールが分かってきたら、見つけにくい色などをフェイントで  
 発展させると色だけでなく、形や物の名前など工夫していく

探求的な遊びの発展・生起するトラブルと解決方法の育ち①

遊びの姿	面白さ・楽しさ・喜び	トラブルと子どもの気持ち	保育者の関わり	解決方法
------	------------	--------------	---------	------

**井形ブロック**

- ・ 保育者が作ったものを引っ張って外す
- ・ なめる
- ・ たたき合わせる

- ・ 外すことができた喜び
- ・ 物の形状を確かめる
- ・ 音や感触を楽しむ

➢ 友だちが持っているものを欲しがる

- ・ ○○ちゃんの持っているおもちゃ、楽しそう!
- ・ ボクが-!(ボクの-!)
- ・ 私がー!(私の-!)

- ・ 今、お友達が使ってるから、後で貸してもらおう、順番ね、と声掛け
- ・ (なるべくトラブル回避をするために) 気を紛らわせて他に目が行くようにする。他の物をお勧め
- ・ 同じものを渡す

共感する(○○君が持っていたので、遊びたかったんだね)

**井形ブロック**

- ・ 車や掃除機などを動かす
- ・ 友達が作ったものを壊す

- ・ 丸い形のタイヤが動く感覚を楽しむ
- ・ 壊すのが楽しい

➢ 友達が作ったものを壊す

- ・ 保育者が作って見せて、壊れるのを楽しむ(わー!こわれたね!)
- ・ 友達が作ったものを壊すことについては、壊そうとしている子どもにバレないよう、おとなが壁になる壊してもいいものを作ってあげる
- ・ 壊された子に保育者がもう一度作る
- ・ 壊した子には軽く泣きまねしたり、ちがうおもちゃに興味が行くようにする

手立てを伝える

**井形ブロック・リブロック**

- ・ 丸い形を作ったブロックを保育者が転がす
- ・ 子ども自身で転がそうとする

- ・ 転がしたブロックを追いかける楽しさ
- ・ 自分で転がせた喜び
- ・ 動物に興味を持ち、名前を呼ぶ

➢ 好きな色を欲しがる、取る

- ・ 友達への意識 面白そう 自分もやってみたい

- ・ 同じ色があったら渡す
- ・ なかったら別の色の提案
- ・ 今はこの色でおしまいだね。次はどの色にする?
- ・ ブロックの数に限りがある場合は個数の制限をする

気持ちの共感  
「いやだった」「ほしかった」「やりたかった」に共感

**レゴブロック・デュプロ**

- ・ 動物の形に興味を持ち、ガオやブーバーなど名前を言う

- ・ 外すことができた喜び
- ・ 物の形状を確かめる
- ・ 音や感触を楽しむ

➢ 少数のパーツの取り合い

- ・ くやしいー
- ・ 本当は自分もしたいけど壊してしまう
- ・ 話を聞いていると、相手の子は違う遊びを始めてしまう

- ・ 時間を決める
- ・ 欲しい気持ちを受け止める
- ・ 代わってもらえるか、まず相手に聞きに行くことを提案する

自分も聞いてもらった相手のことも聞いてみよう

**井形ブロック**

- ・ ただひたすらブロックをつなげていく遊び
- ・ 電車遊び
- ・ 色集め
- ・ 人形遊び

- ・ 外すことができた喜び
- ・ 物の形状を確かめる
- ・ 音や感触を楽しむ

➢ 見立てる面白さ

- ・ 作ったもので友達と会話
- ・ 同じ色を集めて作る楽しさ
- ・ 井形電車づくり

➢ 人を選んで取ろうとする

- 作った物を手放し、それをほかの子が使って「それ私の」トラブル
- ・ 自分の思いを通したい!でも、○○ちゃんと遊びたい

- ・ ○○ちゃんもってたよね?など問いかける
- ・ その子のいいところをみんなの前で伝える

**井形ブロック**

- ・ おまごと遊び(ブロックでアイスを作って友達に食べさせてあげる)
- ・ アイドルごっこ(マイクを作って歌う)
- ・ 動物園作り

- ・ 見立てる面白さ
- ・ 作ったもので友達と会話
- ・ 同じ色を集めて作る楽しさ
- ・ 井形電車づくり

➢ 人を選んで取ろうとする

- 作った物を手放し、それをほかの子が使って「それ私の」トラブル
- ・ 自分の思いを通したい!でも、○○ちゃんと遊びたい

- ・ ○○ちゃんもってたよね?など問いかける
- ・ その子のいいところをみんなの前で伝える

自分も聞いてもらった相手のことも聞いてみよう

**デュプロ**

- ・ 動物園作って遊ぶ(動物を並べる)
- ・ 好きな形を埋める
- ・ 重なることを喜ぶ

- ・ 見立てる面白さ
- ・ 作ったもので友達と会話
- ・ 同じ色を集めて作る楽しさ
- ・ 井形電車づくり

➢ 人を選んで取ろうとする

- 作った物を手放し、それをほかの子が使って「それ私の」トラブル
- ・ 自分の思いを通したい!でも、○○ちゃんと遊びたい

- ・ ○○ちゃんもってたよね?など問いかける
- ・ その子のいいところをみんなの前で伝える

自分も聞いてもらった相手のことも聞いてみよう

おとなと一緒に解決の経験を重ねる

探求的な遊びの発展・生起するトラブルと解決方法の育ち②

デュプロ

- ・ ごっこ遊び
- ・ 斜めに繋げる(山・建物)
- ・ 長く繋げる(車・電車)
- ・ 友達の作品を真似して作る
- ・ 部品の貸し借り

PAX

- ・ 面の多いものを立体的に組み立てて楽しむ
- ・ できたものを電車などに見立てる
- ・ 同じパーツを使い、何個も作る
- ・ 同じ形を集める
- ・ 長くつなげる
- ・ 見本がないので、自分で考えたものを作る(星・キャラクター・建物)
- ・ 同じ色を集めて楽しむ

パチパチブロック

- ・ 繋げたり、立体にしたりする

レゴ

- ・ 剣・鉄砲を作ってなりきる
- ・ 設計図なしで、自分がイメージしたものを作って楽しむ
- ・ 積み上げたり、組み立てたりしたものを「船」「おうち」と見立てて遊ぶ

レゴ

- ・ レゴブロックでタワーを作る
- ・ レゴブロックで家づくり。大きい正方形の板(ブロックがはめられるもの)に仕切りを作ったりして、理想の家づくりをする
- ・ レゴブロックで色を上手に使い、お寿司・お花づくりごっこ遊びとしても楽しむ
- ・ 赤と白のレゴでマグロ
- ・ つぼみを黄色、葉を緑色のレゴで表現

- ・ 見立てる面白さ
- ・ イメージしたものを作る面白さ
- ・ 友達と会話しながら、組み合わせる面白さ

- ・ 繋げたり、立体にしたりする面白さ
- ・ パチッとほまる感覚
- ・ 自分がイメージしたものを作る面白さ

- ・ イメージしたものをよりリアルに形にする面白さ
- ・ 作ったものを遊びの中で使う面白さ

- 一緒に遊びたいけど、折り合いがつけられないトラブル
- ・ 一緒に遊びたいのに、主導権を握られるとトラブルになる
- ・ 一緒に遊びたいけど、リーダーシップも取りたい

- 土台となる基盤など、部品の取り合い
- 手持ちのブロックの数でトラブル
- ・ 作りたいものがあるから取り合いになる

- 作ったもののイメージが異なることでのトラブル
- ・ 知識のぶつかり合い
- ・ 一緒に作りたのに、友達と意見が違う
- ・ 作品の飾る場所の取り合い
- ・ 作った作品を置いておきたい

- 決まった友達と遊びたい
- ・ 気の合う子と遊びたい→入れない子・入ってみたい子がいる

- ・ 一緒に遊べるように、バージョンアップしたらどう?と提案する
- ・ お互いにどう遊びたいのかを聞き、折り合いのつけられるところを探していくように提案する
- ・ どうする〜?先生やったらこうするけどな

- ・ 順番を意識できるように声をかける
- 取られた場合の気持ちを考えられるようにする
- ・ 3歳児なら、安心して遊べるように、一人一枚
- ・ 5歳児にはクラスで10枚くらい(協同の遊びに繋げる)

- ・ イメージを聞きながら、どうして遊んだらいいかを問いかけ、自分たちで解決できるようにしていく

色々な解決方法を知る  
ジャンケン・順番・挙手制・多数決など

話し合い、皆が納得できるような解決を考える。→公平感の育ち、個々の達成感も大切にできるように

自分たちで解決する経験を重ねる

資料 「人間関係研究会」 アンケートより

研究会・講師名
人間関係研究会 卜田真一郎先生

回収数
17

<研修効果>

経験年数	合計数	%
1年未満	0	0%
1～5年	6	35%
6～10年	3	18%
11～20年	2	12%
21年以上	6	35%

研修前		合計数	%
① 興味	5	2	12%
	4	14	82%
	3	1	6%
	2	0	0%
	1	0	0%
	不明	0	0%
② 得意	5	0	0%
	4	4	24%
	3	10	59%
	2	3	18%
	1	0	0%
	不明	0	0%
③ 保育計画	5	0	0%
	4	3	18%
	3	11	65%
	2	3	18%
	1	0	0%
	不明	0	0%

研修後		合計数	%
⑤ 内容理解	5	7	41%
	4	10	59%
	3	0	0%
	2	0	0%
	1	0	0%
	不明	0	0%
⑥ 応用力	5	4	24%
	4	12	71%
	3	1	6%
	2	0	0%
	1	0	0%
	不明	0	0%
⑦ カリキュラム理解	5	3	18%
	4	10	59%
	3	4	24%
	2	0	0%
	1	0	0%
	不明	0	0%

学び・気づき

- ・ 考え方や経験など違いを持った保育者の方たちとの話し合いの中で、色々な保育観に触れることができた。
- ・ 自分と違った視点を学ぶことができてよかった。
- ・ 子どもの思いに寄り添って考えることの大切さを身近に感じられた。
- ・ 「ごっこ遊び」の話し合いを通して、子どもの原点に戻り一から見つめ直すきっかけができた。
- ・ 「走る」に着目して話し合いを重ねたが、「走る」だけでも年齢によって楽しみ方、大人の関わり方が色々あることを学んだ。
- ・ 遊びの中で出てくるトラブルの内容や対応について、年齢に応じて交流でき共感したり学びになった。
- ・ 私はトラブルの対応が苦手だったので、皆の意見を聞くことでとても勉強になった。
- ・ 子どもの興味ある遊びの中で、意識してトラブルに関わることで、子ども一人一人の育ちと向き合うことができた。
- ・ 作成した「ごっこ遊び」の時系列を見ると、次はこうしようと見通しを持てるようになったので、保育に活かしていきたい。
- ・ 日頃の保育を言語化していく事の難しさを学んだ。子どもの姿から成長の意味づけもでき、無意識にしていたことが実はこうだったと改めて認識できた。
- ・ 子どもの思いより常に子どもの育ちが優先されていたと反省する部分がある。子どもが何をおもしろいと感じているのかを深めていけたらと思う。

園内への普及

- ・ 年齢ごとの流れで子どもの姿を学んだので、クラスだけでなく他のクラスとの関わりができる時に、クラスごとの子どもの姿の違いを見たり、子ども同士が遊びを通して一緒に関わられる場を作りたい。
- ・ 日々の保育で行っている事、子どもの行動や気持ち、保育者の思いなど普段あまり言葉にしないことを話し合い表にすることで、新たな発見・気づきがあったので、園でも文字にすることを大切にしていきたい。

# 環境研究会

## ○日程と内容

5月26日（木）	環境研究会の経過と基本講義。次回からの進め方について
6月23日（木）	グループワーク
9月5日（月）	グループワーク
11月14日（月）	グループワーク
12月7日（水）	グループワークの発表・まとめ

## ○講師の紹介



瀧川光治 氏

大阪総合保育大学児童保育学部教授

専門分野は、保育方法学・保育内容学・教育方法学  
遊びの環境づくり、園内研修の方法など研究

## 第3節 研究会のテーマ・研究方法

環境研究会では、これまで「領域“環境”の理解の捉えなおし」と「子どもの遊びの様子を“トキメキ”、“ヒラメキ”、“気づき・発見”の視点で捉える」ことを中心に行ってきました。

### （1）領域「環境」の理解

領域「環境」は、誤解されることが多い領域です。五領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）は、幼稚園、保育所、こども園における教育上のねらいと内容が示されています。幼児期に育てていく方向性が、「ねらい」として3つずつ各領域で示され、そのために経験してほしいことが「内容」として各領域10数個示されています。領域「健康」は、健康な心と体を育むこと、領域「人間関係」は人と関わっていく力、領域「言葉」は言葉でやり取りする力、領域「表現」は豊かな感性や表現していく力を育むことが示されています。

それでは、領域「環境」は何を（どのようなことを）育むことが大切でしょうか。保育室の環境構成や、設定保育の環境構成、自然環境、人的環境といったことを思い浮かべる方がおられますが、そうではありません。その意味で誤解が多い領域と言えます。

そこでまず、どのような領域なのかを確認してみましょう。

領域「環境」は、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ことを意図した領域となっています。そして『保育所保育指針』の乳児(0歳児)の「身近なものに関わり感性が育つ」、1歳から3歳未満児及び3歳児以上の領域「環境」のねらいは、次の通りです。

0歳児	<p>①身の回りのものに親しみ、<u>様々なものに興味や関心をもつ。</u></p> <p>②見る、触れる、探索するなど、<u>身近な環境に自分から関わろうとする。</u></p> <p>③身体の諸感覚による認識が豊かになり、表情や手足、体の動き等で表現する。</p>
1歳から 3歳未満児	<p>①身近な環境に親しみ、触れ合う中で、<u>様々なものに興味や関心をもつ。</u></p> <p>②様々なものに関わる中で、<u>発見を楽しんだり、考えたりしようとする。</u></p> <p>③見る、聞く、触るなどの経験を通して、<u>感覚の働きを豊かにする。</u></p>
3歳児以上	<p>①身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で<u>様々な事象に興味や関心をもつ。</u></p> <p>②身近な環境に自分から関わり、<u>発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。</u></p> <p>③<u>身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。</u></p>

このことから考えると、環境構成や人的環境のことを指すのではなく、育てたいことの視点で書かれていることがわかると思います。

領域「環境」は、子どもが身近な環境の中にある様々なものや事象に興味や関心を持つことから始まります。そして、様々なものや事象を見たり、触れたり、探索したり、自分から関わっていく中で、色々な発見を楽しんだり、考えたりしていく過程が生まれてきます。そのような過程を通して、五感などの感覚の働きが豊かになり、物の性質に対する感覚、数量や文字などに対する感覚が豊かになっていきます。このような過程の中で、子どもが好奇心・探究心が発揮されていくことが大切です。そのため、領域「環境」は、《興味や関心、好奇心・探究心、探索する力、考えたり発見する力、物などへの感覚の豊かさ》といったことを育んでいく領域と言えます。

## (2) 今年度の方向性と研究の経過

2022年度は、(1)の理解を踏まえて、PDCAサイクルを回すために、次の①②を意識しながら研究を進めることとしました。

- |  |
|--|
| <p>①ドキュメンテーションやショートムービーから「トキメキ」「ヒラメキ」「気づき・発見」の視点で子どもの遊びを理解し、保育者の役割や環境構成を考える</p> <p>②「トキメキ」「ヒラメキ」「気づき・発見」の視点の子ども理解を踏まえて、PDCAサイクルをどのように回すかを考える</p> |
|--|

領域「環境」において育んでいきたいことは、2020年度以降の本研究会では、実践的にわかりやすい視点として「トキメキ」「ヒラメキ」「気づき・発見」と称し、下記のように意味づけています。

**トキメキ**・・・「子どもの興味や関心、好奇心・探究心」を捉える視点  
**ヒラメキ**・・・「思考力の芽生え、考えていること」を捉える視点  
**気づき・発見**・・・「発見したこと、物などに対する感覚(感じたこと)」を捉える視点

研究の経過は表1に示しています。研究方法は次の通りです。

- ① については、2回目、3回目の研究会でドキュメンテーションを持参し、各年齢のグループで対話しながら、読み取りを深めてきました。4回目の研究会では参加者が30秒から1分程度の保育場面のショートムービーを持ち寄り、その場で即興的に「トキメキ」「ヒラメキ」「気づき・発見」を読み取り意味づけて、その場面の保育の続きを考えてみました。
- ② については、5回目「まとめ」において、それまでの事例を踏まえて、PDCAサイクルをどのように回すとよいのかについてグループで知恵を出し合いながら考えました。

表1 研究の過程

1回目	「領域“環境”で育むトキメキ、ヒラメキ、気づき・発見」って何か？ PDCA サイクル（評価と改善のサイクル）って何か？
2回目	「ドキュメンテーションから読み取るトキメキ、ヒラメキ、気づき・発見」 ⇒ ドキュメンテーション（写真づきの記録）から、子どもの遊びや活動の中で生まれてくる「トキメキ」「ヒラメキ」「気づき・発見」を読みとる
3回目	「トキメキ、ヒラメキ、気づき・発見が生まれる保育とは？」 * 保育者の役割や環境構成なども含めて考える
4回目	各園のショートムービー（動画）から、トキメキ、ヒラメキ、気づき・発見を実践的に読み取る
5回目	対話① PDCA サイクルを回すためにはどうしたらよいのでしょうか？ 持ち寄った考えを出し合いましょう。 対話② 「環境」研究会で学んだことの中で、各園に持ち帰って 共通理解していきたいことはどんなことですか。 グループワーク 「環境」研究会での学びを、各園で活かすために 「まとめの資料」をグループで作らしましょう。

## 第4節 実践事例から見てきたもの

### (1) トキメキ、ヒラメキ、気づき・発見が生まれる保育

ややもすると、保育の中で声をかけすぎていることが多いが、領域「環境」にあるように子どもたちの好奇心や探究心を育むためには、子ども自身がいろいろなことを考えながら、気づき・発見が生まれるように関わっていくことが大切です。そのためには、普段のそれぞれの遊びの中に、子ども自身のトキメキやヒラメキがあるのでそれを見つけることから始まります。また、保育者が意図的に用意した環境であっても、保育者が流れを作って乗せていくような保育スタイルではなく、子どもたちが自分たちの考えでその活動を進めていき発展していけるように保育することが大切です。

一例として、1歳児クラスのドキュメンテーションから考えてみましょう。

**1歳児 うさぎ組 「ここでも がたんごん！」～カブラ遊び～**

もっ！もっ！

友だちや保育者が並べて遊んでいたカブラ。初めは見ていたE児だったが、「おもしろそう」と感じたのか自分でカブラを手に取り、1本ずつ隙間なく並べ始めた。長くなっていくカブラが嬉しいようで、手にもっていたカブラがなくなると、また取りに行き繰り返し並べていた。

トキメキ

がたんごん

でんしゃ おちちやう…

ヒラメキ

どんどん長くなったカブラを見て、E児はその場を離れ、何かを取りに行く様子。手にして戻ってきたのは電車のおもちゃ。さっそくカブラの上に置くと、手で持ちながら電車を走らせていた。E児にとって並んだカブラはカブラではなく、「道」もしくは「線路」であり、イメージを持って遊んでいた。

電車を走らせていると、もっとならされるように、カブラを追加して並べていた。

もっとなが！

2022/09/05 14:29

トキメキ

E児の様子を見ていたM児が同じように電車を持ってやってきた。E児はM児を受け入れ、走らせて遊ぶ様子を見ながら、どんどんカブラを並べ「道」「線路」を作っていく。最初に楽しいと感じた「並べる」という遊びが、今度は「道」「線路」に変身しイメージを持って「並べる」遊びに変わっていた。

初めて並んだカブラ遊びであったが、乗り物が好きなE児は、並んだカブラを「道」「線路」に見立て、イメージすることで、より並べるという遊びに面白さを感じているようだった。子どもたちのイメージの豊かさ、また子どもは遊びに広がり深まりを作っていく面白さを感じた。

このドキュメンテーションは、1歳児 E君がカブラ(積み木)を床にどんどん並べていくところから始まっています。

最初は隙間なく並べることにトキメキを感じながら次々に並べていましたが、そのうちに、電車を取りに行き、並べたカブラの上を走らせ始めました。このような姿は、「線路みたいだから走らせてみよう!」とまさにヒラメキが生まれた瞬間です。また、線路に見えると気づいた瞬間とも言えます。

端までいくと、さらにカブラを並べ、線路をどんどん長くしていきます。このときにはトキメキやヒラメキが持続していたのだと思います。

このように、「トキメキ、ヒラメキ、気づき・発見を取り入れたドキュメンテーション」を作ると、子どもの遊びや活動の過程がよくわかり、どんなことを楽しんでいるのか、どんな思いや考えが浮かんできた

のか、その結果、どのように遊びが展開していったのかを読み取ることができます。

### (2) 実践事例から考えた「トキメキ」「ヒラメキ」「気づき・発見」の整理

研究会で、それぞれ持ち寄ったドキュメンテーションから「トキメキ」「ヒラメキ」「気づき・発見」を捉えて、付箋で書き出して整理した結果、表2のようになりました。

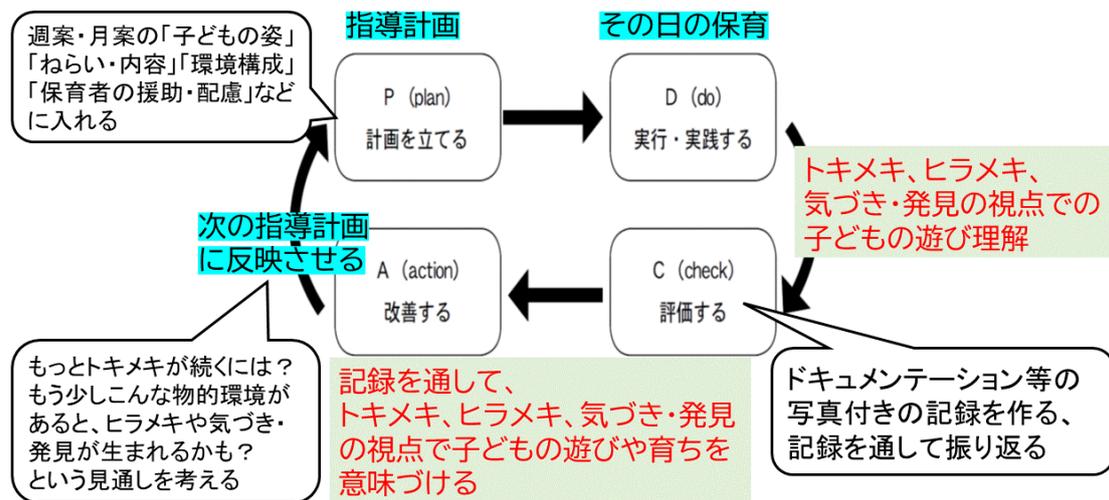
表2 「トキメキ」「ヒラメキ」「気づき・発見」の捉え方

	トキメキ	ヒラメキ	気づき・発見
どんな視点か？ キーワード	子どもの興味や関心、好奇心・探究心を捉える視点  おもしろい、やりたい、目がキラキラ	思考力の芽生え、考えていることを捉える視点  こうしてみたら、どうなるかな？！	発見したこと、物などに対する感覚（感じたこと）を捉える視点  こうやってみたら、こうなった！
どんなときに生まれるのか？	<p>■興味・関心</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・何かに好奇心や興味・関心が生まれたとき（わくわくする、きれい、楽しそう、面白そう、初めての取り組み、好きなものをするとき・・・）</li> <li>・楽しそうなものや興味があるものが目の前にあるとき</li> <li>・友達が楽しそうに遊んでいる姿を見たとき</li> </ul> <p>■好奇心</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・やってみたいと思ったとき（触ってみたい、不思議、これ何！？ もっとやりたい！！）</li> <li>・自分から進んでやってみたいと思えるとき</li> <li>・え、やっていいの？</li> <li>・こんなに～～できるなんて嬉しい！</li> </ul> <p>■遊びや活動の中で</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・夢中になってくりかえし遊んでいるとき</li> </ul>	<p>■探究心の芽生え</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・疑問に思ったとき</li> <li>・もっとこうしたい！と思ったとき</li> <li>・試してみたいと思ったとき</li> <li>・何か違うことが起きたとき</li> </ul> <p>■思いついたとき</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・～～してみようと思いついたとき（こうしたらどうなる？ こうしたら面白くなるかも？ もっとこうしてみよう！ 次はこうしてみよう）</li> <li>・挑戦してみたいとき</li> <li>・遊びが変化したとき（例：こすりだしの力加減や染紙でどんな色を使おうか、どんな折り方にしようかと思いついたとき）</li> <li>・周りの友達がやっている様子を見たとき</li> </ul> <p>■活動の深まり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・遊んでいる中で失敗したときや、思い通りにならなかったときに「～するためにはどうしたらいいかな？」と考えている時</li> <li>・今までとは違う方法で試したくなった時</li> <li>・新しい楽しみ方がわかったとき（色々な玩具や遊具を使ってみよう）</li> <li>・いろいろ考えながらやっているとき</li> </ul>	<p>■やってみた結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・何かをやってみた結果、わかったとき、気づいたとき</li> <li>・くりかえし挑戦してみたとき</li> <li>・くりかえし遊ぶ中で、「・・・すると～～になるんだ」のように「こうしたらこうなる」と気づいたり、「・・・って、こうなっているだ」と気づく。</li> </ul> <p>■気づきから、ヒラメキへ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・くりかえし遊ぶ中で、「～なのではないか？」と気づいたり、「～だから・・・なのかな」と気づいたら、その後、ヒラメキにつながる。</li> </ul> <p>■達成感</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・やった結果、気づき・発見だけではなく、「こんなんできた！」という達成感が生まれる。</li> </ul>

## 第5節 PDCA サイクルを進めるために

### (1) PDCA サイクルの図について

環境研究会では、1回目のPDCAサイクルの図は一般的なものでしたが、5回目（最終回）では下記の図のように、「ドキュメンテーション等の写真付きの記録」「トキメキ、ヒラメキ、気づき・発見の視点での子ども理解」を入れた形で、検討を深めました。



### (2) PDCA サイクルを回していくための保育者の役割

#### 1) Do（保育の実践中）に意識すること

##### ① 子どもの思いやトキメキ、ヒラメキ、気づき・発見に気づく

- ・子どものトキメキに気づく（見守る）
- ・子どもたちが自分で気づき、発見できるようになるべく見守る
- ・子どもの思いや気づきに共感し、個々の遊び方を認識する
- ・遊びのきっかけを作る（子どもの言葉を拾って）

##### ② 子どもへの言葉がけ

- ・援助しすぎない言葉がけ、子どもの様子を見守りながら、最低限の言葉がけを意識する
- ・子どものトキメキ、ヒラメキを見逃さず受け止めて、気づき・発見につなげていけるような言葉がけをする。
- ・「○○しよう～」とかではなく、共感する言葉がけを意識する。

#### 2) Action を考えるにあたって

- ・遊びを広げられるような工夫
- ・一度、興味を持たなかったものでも、誘い続けて遊びにつながるようにする
- ・子ども達の興味・関心を捉え、環境を整えていく

### 3) Action から Plan へ（指導計画作成に向けて）

- ・子どもの興味・関心を捉えた保育の計画
- ・保育者も一緒に楽しめるような（ときめくような）保育の計画

### （3）トキメキ、ヒラメキ、気づき・発見が生まれるための環境構成や準備物の考え方

#### 1) 「やってみたい！」を保障する環境

- ・子どもの「やってみたい！」を保障する（安全面も）環境
- ・したいときにいつでもできる環境、そのためにいつでも取って遊べる配置
- ・やってみたい、さわってみたいと思える環境を用意する
- ・最低限のルールのみで楽しめる自由さ

#### 2) 遊びが充実するための環境

- ・材料などを自分の意志で選べるように環境づくりを工夫する
- ・工夫して小道具などの準備をしていくことが大切
- ・遊びのスペース、人数、おもちゃの数を考える
- ・じっくり遊べる時間の保障
- ・発達や年齢にあった素材や遊びの提供と、そのタイミング

#### 3) 園だからこそ意識したい環境

- ・生活の中にあるものを、園でやってみようと思えるように用意する。
- ・家庭への保育や遊びの理解を促して、園ならではのダイナミックな遊びができる環境

## 第6節 ミドルリーダーとして研究成果を園にフィードバックするには

5回の研究会後のアンケートから、どのようにすればよいかについて、「子ども理解の視点を磨く」「ドキュメンテーションづくり」「園内で、子ども理解の視点を共有し、PDCAにつなげる」「環境構成・環境づくりの視点」の4点で整理をしました。

### 1) 子ども理解の視点を磨く

- ・子どもたちの姿を肯定的に捉えることを園で共有していきたい。
- ・「何にトキメキを感じながら遊んでいるのか」という視点を持って子ども理解を行い、見守っていききたい
- ・子どもがいま興味を持ちトキメキを感じているものに気づく感性や視点を、園内で共有したい。
- ・子どもが夢中に何かをしているときに、学びがたくさんあることを共有していきたい。

### 2) ドキュメンテーションづくり

- ・トキメキ、ヒラメキ、気づき・発見を取り入れたドキュメンテーションを園で作れるようにしていく。

・同じような遊びで、トキメキ、ヒラメキ、気づき・発見を取り入れたドキュメンテーションを何度か作ると、子どもの遊びが継続していく中で、その遊びの「楽しい！」と感じているトキメキ部分に変化していることに気づいた。そのことから、色々な場面のドキュメンテーションを作るだけでなく、1つの遊びや活動を継続的に捉えたドキュメンテーションを作ることも意識していきたい。

### 3) 園内で、子ども理解の視点を共有し、PDCAにつなげる。

- ・今回の研究会で取り組んだように、ドキュメンテーションを使って園内研修をする。
- ・クラスでも子どものトキメク姿を共有できるように伝えることを意識する。
- ・園内では、子どもたちがどんな時にときめいているのか、ひらめいているのか、どんな発見をしているのかを話し合いながら、皆で気づくことができるようにしていく。
- ・日々の保育で、トキメキ、ヒラメキ、気づき・発見というキーワードを使うことで、子ども理解の道筋がわかりやすくなり、職員間で話し合うときにお互いが理解しやすい。

### 4) 環境構成・環境づくりの視点

- ・自分の保育を振り返って、環境についてまだまだ工夫の余地があると感じたので、子どもたちが自分たちで自然に気づき、発見が生まれ、ヒラメいて考えることができるような環境づくりを意識していく。



研究会・講師名
環境研究会 瀧川光治先生

回収数
16

<研修効果>

経験年数	合計数	%
1年未満	0	0%
1～5年	6	38%
6～10年	4	25%
11～20年	2	13%
21年以上	4	25%

	研修前	合計数	%
① 興味		5	31%
		4	56%
		3	13%
		2	0%
		1	0%
		不明	0
② 得意		5	0%
		4	13%
		3	44%
		2	38%
		1	6%
		不明	0
③ 保育計画		5	6%
		4	6%
		3	69%
		2	19%
		1	0%
		不明	0

	研修後	合計数	%
⑤ 内容理解		5	38%
		4	63%
		3	0%
		2	0%
		1	0%
		不明	0
⑥ 応用力		5	38%
		4	50%
		3	13%
		2	0%
		1	0%
		不明	0
⑦ カリキュラム理解		5	19%
		4	69%
		3	13%
		2	0%
		1	0%
		不明	0

学び・気づき

- ・色々な楽しい取り組みを知ることができ、改めて子どもの主体的な遊びの大切さを感じた。
- ・漠然としていた環境構成の工夫が、話し合いや他のグループの発表を聞くことで形が見えやすくなった。
- ・人的・物的環境についてトキメキ・ヒラメキ・気づき発見の視点から子どもの姿を読み取り考えることの重要性を知ることができた。
- ・ドキュメンテーションを見ながら話をする中で、自分になかった発想や気づきを得ることができた。
- ・公立・民間園と交流できたこと、同じ年齢を担当する人と交流できたことで学び直しをさせて頂いた。
- ・子どもが考えを広げていけるように予想して保育の準備をすることが大事だと学んだ。
- ・子ども理解が深まった。
- ・ただ一緒に遊んでいるだけではなく、子どもたちがどういうトキメキ・ヒラメキがあって気づき・発見につながったのかを改めて常日頃考えるようになり、週案や今後の活動に生かしていけるようにした。
- ・どのような活動・遊びでも子どもの気づき・発見に耳を傾け受け止めるようにしてきた。

園内への普及

- ・保育を一人で取り組むことが多いので、周りの保育者にどのような部分に注目して見守ってほしいのかなど、対話していく事の大切さを学んだ。
- ・クラス内のフォトニュースなどで活用し、担任間で共有することができた。良いクラスづくりをしていきたい。
- ・ミドルリーダーとしてしっかり後輩につなげていきたい。

# 言葉研究会

## ○日程と内容

6月16日(木)	講義「子どもの発達と絵本」 進め方について
7月21日(木)	グループワーク
8月25日(木)	Zoom 研究会 グループワーク
9月15日(木)	グループワーク
11月17日(木)	年間指導計画の振り返り・まとめの講義

## ○講師の紹介



長瀬美子 氏

大阪大谷大学教育学部幼児教育専攻 教授

専門は幼児教育学。あそびを通しての子どもの発達、関係の形成を研究。

## 第1節 研究会のテーマと研究方法

### 1) 研究会のテーマ

2022年度の言葉研究会は、2021年度に続いて「絵本を通しての乳幼児の言葉の育ち」に焦点を当てて研究を進めました。幼保連携型認定こども園教育保育要領によれば、領域「言葉」は「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」と書かれています。またねらいとしては、

- (1) 言葉遊びや言葉で表現する楽しさを感じる
- (2) 人の言葉や話などを聞き、自分でも思ったことを伝えようとする
- (3) 絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる、です。

今年度の言葉研究会も(3)の「絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる」に焦点を当てて、「絵本を通しての豊かな経験」をテーマに研究を進めることとしました。

## 2) 研究方法と研究会の概要

言葉に対する感覚や言葉で表現する力を育てることを目標として、0歳児、1歳児の子どもたちにはまず絵本に親しむことから、2歳児以上の子どもたちには絵本そのものを楽しむことはもちろん、絵本から生まれるあそびの様子も含めて報告し合うことにしました。

研究会は、以下のように行いました。

### 第1回

「子どもの発達と絵本」をテーマに講義を行いました。共通理解として、子どもにとって絵本との出会いがもたらす発達の意義を学びました。絵本は子どもにとって、①精神的な安らぎ、②想像性と感性、③言語感覚、④他者との共感（時間と空間の共有を通して）に深くかかわる重要なものであることを確認し合いました。

その上で、0歳児から5歳児の発達特性に合った絵本を選択する視点についても学びました。0～1歳児では、「いっしょに楽しむ」絵本やくりかえしを楽しむ絵本、2～3歳児では、生活に密着したあそびやストーリーのおもしろさを楽しむ絵本、4～5歳児では好奇心に応える絵本や不思議な世界を楽しむ絵本が発達特性と合致しており、楽しめるものであることを確認しました。

ここで学んだことをもとに、次回からは各クラスにふさわしい絵本を選び、子どもたちに読み聞かせを行ったときの子ども様子を報告し合うことにしました。研究会までの間で、すべての参加者は絵本を用いた保育実践についての記録を作成しました。記録・報告する場面は年齢ごとに異なってよいこととし、0、1歳児では絵本を読み聞かせた時の子どもの反応、2～5歳児は絵本をきっかけに始まった子どものあそびの報告など、実践者自身がみんなに報告したいと思う姿を選んでもらいました。

### 第2回

絵本を通しての実践を報告・検討しました。第1回の学びである「発達特性に合った絵本を選択する視点」を参考にして絵本を選択していることがうかがえました。

発達と絵本の関係を大切にし、自身の保育ともつなげて考えやすいように、Aグループは1～2歳児の担任、Bグループは3～5歳児の担任の2グループに分けました。報告・検討の方法は、以下の通りです。

- ① 実際に絵本を見せながら、選択した理由や概要を紹介したうえで、実践を報告し、質疑応答を通して実践を深める

絵本を見合ったり、子どもの様子についてさらに尋ねたり、次はどのように発展させたいかを話したりしながら、実践を検討していきました。

- ② 実践を1本選び、さらに話し合う

共感したところ、子どもの育ちなどについてさらに検討を深めました。

- ③ 話し合ったことを全体で発表する

実践者から実践の概要を報告するとともに、グループの実践者以外1名が実践から学んだことを報告しました。

- ④ 実践に対する講評とまとめを行う

### 第3回

第2回に続き、絵本を用いた保育実践を報告し合いました。第2回と同様にグループ・全体で検討する予定でしたが、急遽オンライン（Zoom）での実施に変更したため、全員に向けての報告へと切り替えました。その後、ブレイクアウトルームを活用にしてグループで交流を行い、交流の報告とそれを受けてのまとめを行いました。

全体での発表としたことで、全員がすべての実践を聞くことができ、1～5歳児までの絵本の楽しみ方を感じることができたよさがありました。その反面、オンライン（Zoom）ということもあり、グループでじっくり検討することができなかつたので、それは第4回の課題としました。

### 第4回

第2回、第3回と同様に、実践を報告し合い、検討・発表を行いました。回数を重ねる中で、レポートも充実してきました。書き方に慣れてきたこともあります。子ども理解を深まったこと、絵本に対する認識や思いが深まったことが大きな要因です。

報告・検討も活発になっていきました。絵本を詳しく見合ったり、レポート以外の子どもの様子を伝え合ったりするなど、検討も深まっていきました。次回は、年間指導計画を持ち寄り、「学びを指導計画につなげる」をテーマに研究会を行うことを伝えました。

### 第5回

第2～4回の実践報告をふまえて、年間指導計画の見直しにとりくみました。実践の中で生まれた子どもの反応、あそびへの発展を指導計画に活かすための視点として、以下の点を提示しました。

- ① 「子ども理解」の視点：子どもの事実と実態を把握しているか
  - ② 「ねらい」と「内容」の視点：子ども理解と全体的な計画に即したねらいが設定され、内容が選択されているか
  - ③ 「環境」と「準備」の視点：ねらいにふさわしい環境と準備が計画されているか
  - ④ 「援助」の視点：一人ひとりの子どもとねらいにそった援助が計画されているか
- その中の①②の視点から、年間指導計画の見直しを行いました。

実践を通して年間指導計画を見直す中で、ねらいが子どもの実態に即していない点、活動への発展の可能性を見出しました。ここで気づいたことを来年度の年間指導計画の作成に活かすことが重要であることも確認し合いました。

## 第2節 実践事例から見えてきたもの

第2～4回で絵本を通しての実践を報告・検討しましたが、多様な子どもたちの絵本の楽しみ方が報告され、それぞれ魅力的なものでした。また、3回の報告を通して、子どもたちの育ちを感じることができました。実践検討を通して学んだことをまとめます。

## 1) 絵本での楽しい経験が生活経験とつながっていく

### 1歳児『どんないろがすき』（やなせたかし作詞、100%ORANGE 絵、フレーベル館）

好奇心が旺盛で、探索活動が楽しくなってきた元気な子どもたちでしたが、4月当初は新入園児が加わり、クラスが落ち着かない状況がありました。絵本の時間を設定しても興味を示さず、座って絵本を見ることも難しい状態でした。そこで、「歌が大好き」という子どもたちの特性を生かして、歌絵本から読み始めました。

『どんないろがすき』の絵本は、「どんないろがすき」というメロディーが何度もくりかえし出てきます。保育者は、①子どもにも覚えやすく、口ずさみやすい、②子どもたちが絵や色に興味をもっている、という二つの理由からこの絵本を選択しました。

保育者が「『どんないろ』読もうか」と声をかけて表紙を見せると、絵本が見える場所に自分から移動し、座って参加するようになりました。子どもたちの中に、絵本を見ることの楽しさと期待感が生まれてきたのがよくわかります。

絵本を読み始めると、歌が好きな子どもたちは、身体を揺らしたり、手を叩いたりしながら、笑顔で楽しそうに絵本を見ていました。特に楽しんでしたのは、絵本に出てくるものの名前を言ったり、同じ色のものを自分の周りから探してくる時でした。この様子は、自分に引きつけて「いっしょ」を楽しんでいることの現れとして、とても重要な育ちの姿だと感じました。

こうした絵本経験は、子どもたちの生活経験にもつながっていきました。生活やあそびの場面で、『どんないろがすき』の絵本に出ている色を見つけると、ブロックをもって「あか」と言って知らせてくれたり、自分の洋服が同じ色であることを行動で示して保育者に知らせるような姿も見られるようになりました。最後にページに出てくる虹が大好きになり、家に帰ってからも「虹」という言葉を言うようになったということも報告されました。

この実践報告から、絵本での楽しい経験が生活経験とつながっていくことがわかります。子どもの興味から出発し、くりかえし絵本を楽しんだことで、色への興味がいっそう強くなり、周りのものへの興味へとつながっていきました。また、自分が発見したことを保育者に伝えようとする姿も生まれてきており、言葉や伝えたい気持ちが育っているのがわかります。保育者が子どもの発見に「そうだね」「○○だけ」と共感的な応答を行ったことも言葉の育ちにつながっています。

保育者は、こうした子どもの姿から「色に関連するあそびも計画していきたい」という思いを話していました。絵本から生まれた子どもの興味が、生活へ、あそびへと発展していくことの楽しさと大切さを学びました。

## 2) 子どもの行動を通して、「絵本に親しんでいく過程」を発見する

### 2歳児『ばけたくんシリーズ ばけばけばけばけ』（岩田明子文・絵、大日本図書）

おばけの絵本に興味を示す子どもが増え、その姿から運動会でおばけをテーマにした活動を取り入れていこうと考えて、保育者はこの絵本を選択しました。

『ばけばけばけばけ』は、くいしんぼうのおばけの子「ばけたくん」が、誰かのおうちでつまみ食いをするお話です。ペロペロキャンディーを食べるとうずまき模様になり、いちごを食べるといちごになり、きの

こを食べるときのこに変身します。誰かが起きてきて、「ばけたくんはどうなる?」と思ったら、最後には見つかってしまいます。

保育者は、子どもたちが絵本の世界を十分に楽しめるように、次のページをめくる際に少し間を置き、子どもたちがワクワクする時間をつくりました。子どもたちは、ページをめくるたびに、「楽しみ〜」「どうなるかな〜?」など、思い思いの言葉を発しながら次を期待しながら見ていました。いろいろなものを食べて変身するたびに、「うわ〜!」と声を出して驚いていました。おばけが見つかる場面では、ドキドキしながら見ている様子もうかがえました。絵本をもとにおばけごっこも楽しんでいきました。おばけの制作をしたり、おばけに変身してトイレに行ったりを楽しみました。

この実践報告の中から、1〜2歳児の絵本に親しんでいく過程に気づくことができました。この絵本を通して子どもたちは、①自分で好きな絵本を探してもってくる、②絵本が始まるのを期待して待つ、③絵をじっくりと見る、④次を予想して楽しむ、⑤おばけになって楽しむ、⑥おばけの制作を楽しむなど、多様な楽しみ方を経験しました。

興味のあること、楽しいことが子どもの主体性を育て、自ら楽しいことを見つける力を育てます。乳児期から、子どもの興味・関心のありかを子どもの姿から発見すること、その思いにそった楽しい絵本をくりかえし楽しむこと、子どもの反応を感じ、それに応える活動へと発展させることの大切さを確認し合うことができました。

### 3) 絵本を通して知的好奇心は豊かに育つ

#### 4歳児『ふしぎいっぱい写真絵本 ミミズのふしぎ』(皆越ようせい写真・文、ポプラ社)

自然環境に恵まれた園で、園庭での虫探しやレインコートを着ての雨の日の園庭散策など、自然に親しむ活動を積極的に採り入れている園での実践です。園庭でミミズを捕まえる姿も増えてきました。「生き物について知ってほしい」という思いから、保育者はこの絵本を選びました。いつでも自分で取って見られるように絵本は保育室に置きました。

この絵本は、表紙からインパクトの強い絵本です。ミミズの産卵、食事、越冬など珍しい場面が写真で表現されています。子どもたちはこの絵本を見つけると「読んでほしい」と興味をもちました。保育者はこの絵本を読む際に、「ミミズってこうだよ」と教えようとせず、子どもが「ミミズのふしぎ」を絵本から感じられるように読み進め、子どもの言葉をこれまで以上にしっかり聞くようにしました。

絵本を見てからの子どもたちは、園庭でミミズのうんちを発見し、「こんなところにあった」「においはどうかな?」とますます興味をもちました。産卵の場面から、「ミミズの卵が見てみたい」と探しましたが、見つかりませんでした。そこから、「ミミズのおうちづくり」も始まりました。

4〜5歳児は、「考える力」「わかる力」が育つ時期です。その時期に、知的好奇心が豊かに育つ経験はとても重要です。今回の実践はインパクトのある絵本が経験のスタートでした。研究会の中でこの絵本が紹介されたとき、あまりのインパクトに参加者みんながとても驚いたのですが、驚きつつももう一度見たくなる絵本でした。子どもたちが引き込まれたのも納得です。

「○○に関心をもってほしい」「○○についてもっと知ってほしい」と思うと、ついつい子どもに正しい知

識を教えようとしたり、子どもに答を求めがちです。保育者自身も報告の中で、「質問や答を求めてしまいそうになる場面もあった」と話していました。それをせずに、子どもが他児に自分の発見を言葉で伝えようとするのを大切に見守ることで、一人ひとりの言葉も豊かに育ち、子ども同士の関係も広がっていきました。4～5歳児という「考える力」「わかる力」が育つ時期に、その発達要求にふさわしい絵本との出会いをつくることの大切さを確認しました。

#### 4) 絵本をきっかけに、あそびがイメージ豊かに発展する

##### 4歳児『くすのきだんちへおひっこし』（武鹿悦子作、末崎茂樹絵、ひかりのくに）

絵本を読んだ後、楽しみながら話の内容をふりかえっていくことで、集中して話を聞く様子が増えてきました。この絵本は、10階建ての「くすのきだんち」の管理人のもぐらが、住人たちと助け合いながら穏やかに暮らしているお話です。住人は音楽家のきつね、大工のさる、看護師のうさぎなどいろいろな動物です。1つ空いていた部屋に新しい住人が引っ越してきます。新しい住人に対して、他の住人は優しく温かく接していきます。

保育者は、この絵本を通して、一人ひとりのちがいを知り、それを受け入れること、人の優しさや温かさにふれ、思いやる心を感じてほしいと思って選択しました。園の近くにも団地があることから、興味をもち、イメージしやすいようにしました。

子どもたちは、絵本に登場する動物を通して、いろいろな職業に興味をもって絵本を楽しんでいきました。子どもたちはドキドキ・ワクワクしたり、登場人物の気持ちに共感しながら絵本を楽しんでいたようでした。

絵本の楽しさは、他のあそびにも派生していきました。以前からカプラを楽しんでいましたが、高く積み上げたものに対して、『くすのきだんち』みたい」とイメージを重ねることで、あそびが変化していきました。「この辺りがきつねさんの家で・・・」とイメージをもちながらカプラをつくる姿や「こんなかたちの『くすのきだんち』にした」など、それぞれのイメージを形にして楽しむようになりました。こうした子どもの姿から、保育者は「子どもたちが入れるくすのきだんちづくり」を試みたいと報告していました。保育者の中にも楽しあそびのイメージがふくらんできていることがわかります。

絵本に出てくるものをイメージしてそれを形にしていくことは、4～5歳児の子どもたちにとって本当に楽しいものです。それは、自分だけ、自分たちだけの世界を、自分の力で、自分たちの力で作り上げることができる経験だからです。そのきっかけとなる絵本を選び、あそびへと発展させていくことが保育者の大切な役割であることを再認識しました。

### 第3節 PDCA サイクルを進めるために

#### 1) 保育におけるPDCAサイクルの手順

##### ① 子ども理解にもとづく計画の作成 (P)

通常のPDCAはP(計画)が第一段階にありますが、保育の場合には、その前に「子ども理解」が必ずあります。5歳児といっても年によってまたクラスによってその特徴は異なり、一人ひとりの子どもにも個性

や特性があるからです。そこで、保育における第一段階は「子ども理解にもとづく計画の作成」です。

子ども理解にもとづいて計画を作成するためには、子どもやクラスの状況を多面的にとらえることが不可欠です。子どもや子ども集団（クラス）の「育ちつつあること」と「課題」を的確に把握し、そこから「ねらい」「内容」「環境」「援助」を考え、計画を作成することが必要なのです。

## ② 保育実践 (D)

作成した計画にもとづき、保育を行うのが第二段階です。ここでは、ねらいを明確にもちながらも、計画に子どもを合わせるのではなく、子どもやクラスの状況を把握し、柔軟に対応することが求められます。

## ③ 記録、ふりかえり、評価 (C)

保育を行って終わりではなく、記録を通して保育をふりかえり、評価を行うのがこの第三段階です。目標やねらいに照らし合わせながら、「育った姿」と「残された課題」を明らかにします。そこから、「継続して行うべきこと」と「今後の課題や改善すべきこと」を明らかにするのが評価です。

## ④ 改善、計画への反映 (A)

最後の段階が保育の改善に向かう段階です。改善が必要と判断されたことに対して、改善方法を考え、指導計画に反映します。「保育の改善」というと、方法や援助の改善（直接的な働きかけの改善）に目が向きがちですが、保育の方法や援助の改善だけにとどまらず、子ども理解、ねらいの設定、保育内容の選択についても検討することが重要です。

子ども理解が不十分であったり、ねらいが子どもの姿とかけ離れていたり、ねらいと保育内容が合致していなかったりすれば、子どもに適切な経験を提供することはできません。改善は、総合的な観点から行うことが重要だと言えます。

## 2) とりくんでみて

第5回の研究会で、指導計画の見直しにとりくみました。「子ども理解」の視点、「ねらい」と「内容」の視点、「環境」と「準備」の視点、「援助」の視点にそって、年間指導計画に加筆・修正しました。

3回の実践記録・報告を通して学んだことを指導計画に反映させることは参加者にとって難しい課題だったようでしたが、どの実践者も学んだことをいねいに指導計画に加筆・修正していました。その中で多くの実践者が「年間を通して絵本を楽しむ経験」の重要性を感じ、年度の初めから絵本にふれる経験を積み重ねることができる年間指導計画への改善が行われました。

今回の学びの中で、どの年齢でも、4月から絵本との出会いをつくり、絵本経験を積み重ねることの可能性を感じることで、「1年を通して絵本を楽しむ年間指導計画」の作成がイメージできたようでした。

PDCAサイクルを進めるためのポイントは「ふりかえり」にあります。記録をとり、保育をふりかえる中で、子ども・クラス理解は深まり、保育の改善点を見出すことができます。そしてそれを計画に位置づけることが必要です。計画に位置づけるからこそ、意識的にとりくむことができます。子どもやクラスに合ったねらいを設定し、必要な保育内容を選択し、環境を整え、援助を構想して保育にあたることができます。そのことが、子どもたちに豊かな経験を提供することにつながるのです。

## 第4節 ミドルリーダーとして研究成果を園にフィードバックするには

5回の研究会を通して、参加者にはさまざまな学びがあったことと思います。その学びをこれからの保育や次年度以降の指導計画の作成につなげてくださることを期待しています。それとともに、学びを個人のものに終わらせずに、園の保育にフィードバックしてほしいと期待しています。

個人の学びを園の保育にフィードバックするためには、以下のことが大切だと考えます。

第一に、学びのふりかえりです。知らなかった絵本と出会い、そこから生まれる子どもの反応や楽しみ方、あそびへの発展を学んできました。自分では選択しないような絵本に大きな可能性を感じたり、この絵本をクラスの子どもたちに読んでみたい、あそびにつなげてみたいと思ったものも多かったことでしょう。今回の研究会での経験が自分にとってどのような学びとなったかをふりかえり、確認することで、自分の確信となります。確信をもって自分のことばで他者に伝えることができるために、5回の学びをふりかえってみてほしいと思います。

第二に、できるところから行動につなげていくことです。クラスの子どもたちに読んでみたいと思った絵本は、機会を見つけて読んでみる、あそびにつなげてみたいと思ったものもできるところからやってみてください。そうしているうちに、学んだことが自分のものとなります。自分の担任している年齢には適していないという場合には、該当する年齢の担任に伝えて、機会があれば実践できるように相談してみるのもいいでしょう。報告してくださった先生のクラスとは、反応や楽しみ方がちがうかもしれません。それも新たな発見です。実践を記録し、子どもの姿にそって自園の子どもたちにふさわしい保育内容の選択につなげていきましょう。

第三に、職員会議などの機会を活用して、園で研究会報告とそれにもとづく提案をしてみてください。「こんなことが大切だと学んだ」「指導計画の中にこのことを位置づけてみたい」「この絵本をもとにこんな活動を行ってみたい」などを伝え、他の保育者からの意見も聞いてみてください。やってみてどうだったかも報告するようにすると、経験を整理でき、次の見通しにつながります。

学んだことを自身の経験にし、それを園に発信していく、これが研究成果を園にフィードバックするということです。今年度の学びが、来年度以降の個人と園の保育の充実につながることを期待しています。



資料 「言葉研究会」 アンケートより

研究会・講師名
言葉研究会 長瀬美子先生

回収数
11

<研修効果>

経験年数	合計数	%
1年未満	0	0%
1～5年	2	18%
6～10年	5	45%
11～20年	2	18%
21年以上	2	18%

研修前		合計数	%	研修後		合計数	%	
① 興味		5	5	45%	⑤ 内容理解	5	7	64%
		4	4	36%		4	4	36%
		3	2	18%		3	0	0%
		2	0	0%		2	0	0%
		1	0	0%		1	0	0%
		不明	0	0%		不明	0	0%
② 得意		5	0	0%	⑥ 応用力	5	7	64%
		4	1	9%		4	4	36%
		3	9	82%		3	0	0%
		2	1	9%		2	0	0%
		1	0	0%		1	0	0%
		不明	0	0%		不明	0	0%
③ 保育計画		5	1	9%	⑦ カリキュラム理解	5	4	36%
		4	2	18%		4	5	45%
		3	6	55%		3	1	9%
		2	2	18%		2	0	0%
		1	0	0%		1	0	0%
		不明	0	0%		不明	1	9%

学び・気づき

- ・他の先生の話聞いて遊びのバリエーションが広がったり、絵本の選択の仕方が変わった。
- ・絵本の内容を取り上げて子どもたちとなりきって、ごっこ遊びをするなど楽しめた。
- ・言葉の発達は自分自身が子どもの発見・思いに気づき、それを言葉にしたり思いを受け止めることで、言葉での表現が増え発達を促されていると思った。
- ・絵本を通して子どもの意識が変わったり、考えるきっかけにつながっていると感じた。
- ・自分自身が色々な絵本を手にとることができ、カテゴリーも広がった。
- ・子ども同士の言葉のやりとりが増えたので、絵本やその後の取り組みを実践できてよかったと感じている。
- ・今まではたくさんの絵本に出会わせてあげたいと思っていたが、今回の研究会で子どもをよく観察し、何に興味があるのか楽しいと思っているのか、どんなことを吸収しているのかを知って、そこからねらいを立てて絵本を選ぶことで成長につながると気づいた。
- ・活動の導入として絵本を選んでしたが、絵本が主体として遊びを発展させるという新たな絵本のとらえ方をしたいと思った。

園内への普及

- ・絵本や指導計画を考えていく上で、園全体で考えるようにしていきたい。

# 表現研究会

## ○日程と内容

6月14日(火)	講義「指針・要領と表現領域」 進め方について
7月5日(火)	動画発表・グループワーク
8月9日(火)	Zoomによる研究会(動画発表・グループワーク)
9月6日(火)	動画発表・グループワーク
11月9日(水)	動画発表・グループワーク、年間まとめ

## ○講師の紹介



永瀬泰一郎 氏

畿央大学教育学部准教授

保育学、幼児教育学、保育内容学(環境・表現)、  
子どもの造形を専門とする

### 担当講師よりまとめについての思い

皆さんこんにちは。今回表現研究会を5回にわたり執り行わせていただきました。今回のメンバーは担任をされている先生方で、毎回子どもと活動した写真や動画を持ち寄ってもらいました。また、グループに分かれて話し合いがメインでおこなってきました。普段保育にかかりきりで大変なはずなのに、研究会を楽しみに来ていただけた気がしています。研究は難しいと思いませんか。子どもがもっと見えてくるって楽しいです。同じ子どもの写真や動画を見ているのに、自分だけで保育していたら気が付かなかったことが気づかせてもらえます。それは反省するようなことではなくて、保育の質が向上した瞬間です。このまとめを読んでいただいた方にも、そんな保育をすることへの喜びがちょっと感じてもらえたらと思いながらまとめてみました。是非園内研修でも、また、仲のいい保育仲間とでもいっしょに試してもらえれば幸いです。

## 第 1 節 研究会のねらいと進め方

### 表現研究会のねらい

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにするために PDCA サイクルを学ぶなかで、保育者及びミドルリーダーの役割について考える。

### 進め方

#### 1 回目

感性と表現に関する領域「表現」について幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領に書かれている「ねらい」「内容」「内容の取扱い」について確認をおこなった。

また、2 回目以降の発表として、2 分間ほどの動画の撮影とポートフォリオの提出を課題とし、グループに分かれて発表し合うことを伝えた。課題の活動は「絵」「造形」である。

## 第 2 節 研究内容と学び

### 1. 指針、教育・保育要領と表現領域

### 表現領域に注目して

	乳児保育	1歳から3歳未満児	幼児教育
視点・領域	身近なものに関わり感性が育つ	表現	
方向目標	身近な環境に興味や好奇心をもって関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基盤を培う。	感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。 (幼稚園教育要領・こども園教育・保育要領とも共通)	
ねらい	①身の回りのものに親しみ、様々なものに興味や関心を持つ。 ②見る、触れる、探索するなど、身近な環境に自分から関わろうとする。 ③身体の諸感覚による認識が豊かになり、表情や手足、体の動き等で表現する。 (教育・保育要領共通)	①身体の諸感覚の経験を豊かにし、様々な感覚を味わう。 ②感じたことや考えたことなどを自分なりに表現しようとする。 ③生活や遊びの様々な体験を通して、イメージや感性が豊かになる。 (教育・保育要領共通)	①いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。 ②感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 ③生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。 (各要領とも共通)

乳児保育 身近なものに関わり感性が育つ	
内容	内容の取扱い
①身近な生活用具、玩具や絵本などが用意された中で、身の回りのものに対する興味や好奇心をもつ。 ②生活や遊びの中で様々なものに触れ、音、形、色、手触りなどに気付き、感覚の働きを豊かにする。 ③保育士等と一緒に様々な色彩や形のものや絵本などを見る。 ④玩具や身の回りのものを、つまむ、つかむ、たたく、引っ張るなど、手や指を使って遊ぶ。 ⑤保育士等のあやし遊びに機嫌よく応じたり、歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しんだりする。	上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。 ①玩具などは、音質、形、色、大きさなど子どもの発達状態に応じて適切なものを選び、その時々の子どもの興味や関心を踏まえるなど、遊びを通して感覚の発達が促されるように工夫すること。なお、安全な環境の下で、子どもが探索意欲を満たして自由に遊べるよう、身の回りのものについては、常に十分な点検を行うこと。 ②乳児期においては、表情、発声、体の動きなどで、感情を表現することが多いことから、これらの表現しようとする意欲を積極的に受け止めて、子どもが様々な活動を楽しむことを通じて表現が豊かになるようにすること。

## 1歳から3歳未満児

内容	内容の取扱い
①水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ。	上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。
②音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ。	①子どもの表現は、遊びや生活の様々な場面で表出されるものなのであることから、それを積極的に受け止め、様々な表現のしかたや感性を豊かにする経験となるようにすること。
③生活の中で様々な音、形、色、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして遊ぶ。	②子どもが試行錯誤しながら様々な表現を楽しむことや、自分の力でやり遂げる充実感などに気付くよう、温かく見守るとともに、適切に援助を行うようにすること。
④歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする。	③様々な感情の表現等を通じて、子どもが自分の感情や気持ちに気付くようになる時期であることに鑑み、受容的な関わりの中で自信をもって表現することや、諦めずに続けた後の達成感等を感じられるような経験が蓄積されるようにすること。
⑤保育士等からの話や、生活や遊びの中での出来事を通して、イメージを豊かにする。	④身近な自然や身の回りの事物に関わる中で、発見や心が動く経験が得られるよう、諸感覚を働かせることを楽しむ遊びや素材を用意するなど保育の環境を整えること。
⑥生活や遊びの中で、興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現する。	

## 幼児教育

内容
①生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
②生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
③様々な出来事の中で、感動したことを伝えあう楽しさを味わう。
④感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
⑤いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
⑥音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
⑦かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
⑧自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。
(幼稚園教育要領、認定こども園教育・保育要領に踏襲)

## 幼児教育「表現」内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

### ↑<削除>

①豊かな感性は、(自然などの)身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の子どもや教師と(保育士等と)(保育教諭等と)共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。=<追記>

②幼児期の(子どもの)自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師(保育士等)(保育教諭等)はそのような表現を受容し、子ども自身の表現しようとする意欲を受け止めて、子どもが生活の中で子どもらしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。

③生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、=<追記>他の園児の(子どもの)表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

## 「豊かな感性と表現」の具体的な姿

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10項目には、46の具体的な姿がある。

○みずみずしい感性を基に、生活の中で心動かす出来事に触れ、感じたことや思い巡らしたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりして、表現する意欲が高まるようになる。

### （3つの具体的な姿）

- みずみずしい感性を基に、生活の中で心動かす出来事に触れ、思いを膨らませ、様々な表現を楽しみ、感じたり考えたりするようになる。
- 遊びや生活の中で感じたことや考えたことなどを音や動きなどで楽しんだり、思いのままにかいたり、つくったり、演じたりなどして表現するようになり、友達と一緒に工夫して創造的な活動を生み出していくようになる。
- 自分の素朴な表現が先生やほかの幼児に受け止められる経験を積み重ねながら、動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの喜びを感じ、友達と一緒に表現する過程を楽しみ表現する意欲が高まるようになる。

### 領域・指針をなぜ見直したか

『何だ、ねらいと内容が書いてあるだけじゃない』と、思われませんでしたか。あらためて読んでみると、皆さんの保育とうまく合っているのでしょうか。今回は子どもの絵の取り組みについて限定し研究会を進めました。保育実践を見させてもらおうと、なぜか子どもに過剰な表現を求めているように見えることがよくあります。また、自分の保育は正しいかどうか不安になるところだと思います。そんな時に一度確認してみればいいのが「ねらい」と「内容」と「内容の取扱い」です。意識していなかったのに「ねらい」「内容」がうまくあてはまると、なんだかホッとします。「内容の取扱い」は保育者にとっての援助・配慮について振り返ることができます。2回目以降は「ねらい」「内容」「内容の取扱い」をチェック項目のように使用しながら保育を分析していきました。



2. 保育ポートフォリオ

# 保育ポートフォリオ 記録者 ( )

歳児組	子どもの読み取り方	チェック	保育者の関わり方
年 月 日	何かに興味を持っている		同じものを見る
園児数： 人	チャレンジしている		ポジティブな態度
出席数： 人	夢中になっている		見守り重視
対象児：	気持ちを表現している		一緒に共感・感動
	自分の役割を果たしている		ポジティブな言葉
ラーニング ストーリー（学びの物語）			
写 真  絵  作 品	「ハイ、チーズ！」の写真はNG！		
子 ど も の 声 ・ 状 況			
ポジティブ・シンキング		保育の振り返りと発展	

### 保育ポートフォリオの使い方

- 写真が何歳何組のいつの写真か、クラスの園児数と出席人数、対象児はだれか（書けないときは A 児等）を記載します。
- ラーニング ストーリー（学びの物語）の【写真・絵・作品】のところに画像データを添付してください。
- 写真を見ながら上記の表【子どもの読み取り方】のチェック表の当てはまる視点にチェックを付けます。「何かに興味を持っている」「チャレンジしている」「夢中になっている」「気持ちを表現している」「自分の役割を果たしている」の中から 1 つか 2 つ、視点にチェックを入れてください。
- 写真を見ながら上記の表【保育者の関わり方】のチェック表の当てはまる視点にチェックを付けます。「同じものを見る」「ポジティブな態度」「見守り重視」「一緒に共感・感動」「ポジティブな言葉」の中から 1 つか 2 つ視点を付けますが、ない場合はつけなくてよいです。
- ラーニング ストーリー（学びの物語）の【子どもの声・状況】には写真のエピソードを書きます。

#### 例えば

A 児)「わあ、色が変わってきた」	→	T)「本当、変わってきたね」
B 児)「やってみたい！」	←	
	→	T)「ここでやってみる？」

このように実際のやり取りで書いても結構です。

#### 例えば

A 児は色水遊びを楽しんでいた。赤ばかりを作っていたが、先に作っていた青の色水を混ぜた際に色の変化に気付きとても驚く。それを見ていた B 児が……

このように書くときはエピソードとして客観的に書きます。「思った」「感じた」等記録者の感情は入れないように観察したままの状況を書きます。

- 【ポジティブ・シンキング】には、子どもの姿をポジティブにとらえて、育った姿や子ども理解できたことを書きます。ここでは主観が入っても結構です。子ども理解をする際に使うのが【子どもの読み取り方】の視点です。これまでの例えでいうと、『色水遊びに夢中の A 児。好きな青を作るとすぐに赤を作りだしていた。普段はあまり赤を使うところは見ないが、薄い色ができたのが本人にはきれいに思えたのか、光にかざして嬉し

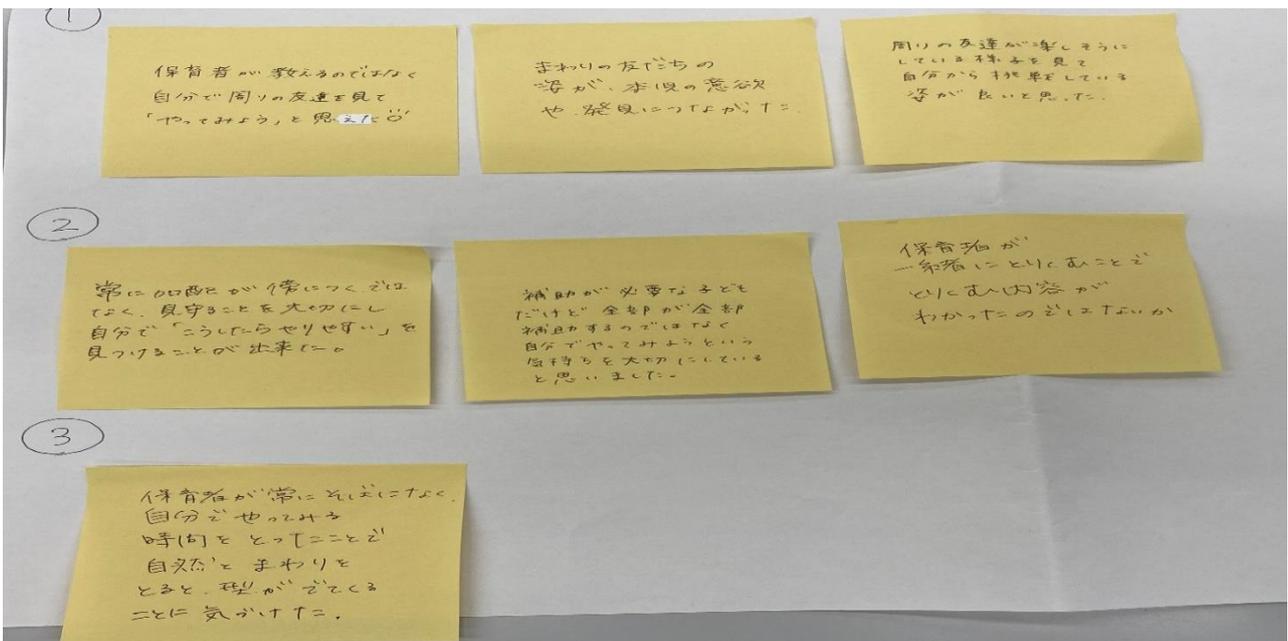
そうに見ている。きっと……』

- 【保育の振り返りと発展】の枠は開けておいて、グループで相談した後に保育の次の手立てとして書きます。

### 動画、ポートフォリオを通して(2回目以降について)

子どもの活動している動画を撮ってきてもらう担当と、ポートフォリオを作ってきてもらう担当に分かれて、5回目まで行う。

- (1) 動画を見て①子どものどの点が良いと思えましたか。②保育者のどんなかわりがいいと思えましたか。③子どものどんな点が育っていると思えましたか。
- (2) 表現領域の視点ではどんな風に見えるのか話し合ってみよう。
- (3) 写真を見てポートフォリオのポジティブシンキングを自分ならどんな風を書くのか付箋に書いてみてポートフォリオに貼っていこう。(自分の視点と他人の視点)
- (4) グループの意見を取り入れると、保育の振り返りと発展はどのように書けそうか、書いてみよう。



### 話し合いのポイント

ただ動画を見るだけでは、何に注目すべきなのかわからなくなることもあるでしょう。今回のように3つくらいの問いがあると、動画を見ながらも振り返って考えることができます。特にミドルリーダーとして保育者にかかわるときには悪いところの指摘より良い点に気付いてあげられるようになってみましよう。保育を見られる側も資料を作って発表するので、認められるようなところもちになると保育をしていく励みになるはずです。

2022年 6月 23日		子どもの読み取り方	チェック	保育者の関わり方
園児数: 11人	何かに興味を持っている	✓	✓	同じものを見る
出席数: 9人	チャレンジしている			ポジティブな態度
対象児: A児	夢中になっている			見守り重視
	気持ちを表現している		✓	一緒に共感・感動
	自分の役割を果たしている			ポジティブな言葉

ラーニング ストーリー (学びの物語)



写真・絵・作品

子どもの声・状況

ポジティブ・シンキング

＜自分の視点＞

- ・車への気付き
- ・筆で絵の具の楽しさ
- ・興味や感動を伝える

＜保育者の視点＞

- ・雨が降った時の発見につなげるきっかけ
- ・筆を使用する楽しさ、描画への興味
- ・A児の成長
- ・2歳児の筆の導入

筆を使用する楽しさを、自然に感じてもらいたいです。筆で絵の具の楽しさを伝えることが、A児の成長につながります。

壁に貼り付けた紙に描くことで、筆が落ちていく様子に気付くきっかけになったように感じます。また、それを保育者前に行うことで、A児の成長につながったと思います。

筆が上から下に落ちる様子がわかったA児は、雨が降った時などもその発見につなげるきっかけになったと思います。

### 自分の視点・他人の視点

ポートフォリオの写真とエピソードから、子どもの活動や遊び・表現について各々の保育者にも付箋に書いてもらいました。複数の保育者で保育を見たり考えたりすることで、子どもの姿がよりよくわかり子どもの次の可能性が広がります。言い換えると、保育者の想定が広がるということです。そのために自分の持つ視点と同じものは付箋に線を引くなどチェックしていき、自分にない視点を浮かび上がらせます。次の保育実践から意識しはじめることで、保育の質の向上にもつながります。

私永先生 保育ポートフォリオ

目的

- ・筆に馴染ませてきたことへの共感
- ・子ども自身が気づいて、せっせと描く姿に共感

「ハイ、チーズ」の写真はNG!

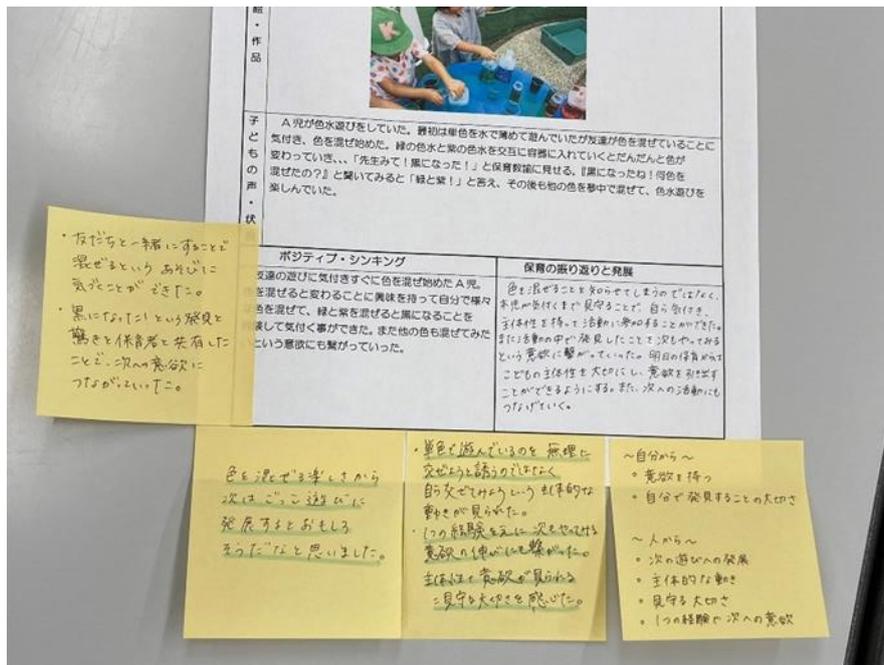
- ・小房が片手は粉土をこねる姿や歯の正振らせすくは良いと(遊ばず) 思ふ。
- ・両手や片手は粉土をこねる姿、何かが作るようにフワフワしている姿が写真の発見となる!
- ・楽しい気持ち(笑)が共感している。

明確に子ども前に保育者がいることで、楽しさを、感動を、何かが作るの事不思議さを共有することができた。

- ・小房にこねることで、大ではできない(リボン)を作ることで、言葉で表現する。

保育の振り返りと発展

皆さんが書いて下さったコメントを見て、私自身に子どもたちの思いに共感する視点が多かった気がしますが、言葉の観点から見て下さることで、改めて気づかされたことが多くありました。一人ひとりが気づいた中で保育者が進められるようになっていきたいと思います。



## 今回の研究会からの学びについて

毎回のように仲間の持ってきたポートフォリオに付箋を付けていきながら、子どもの姿について吟味してきました。これは保育上の何にあたるのでしょうか。

PDCAサイクルの一部にあたります。

『P (plan) 計画を立てる』これは指導計画であり日案のことです。そして、その日の保育のことが『D (do) 実行・実践する』です。ただし、させるのを重きに置くのではなく、実際の子どもの様子をよく見ることを重きに置きます。『C (check) 評価する』は子どものチェックというよりも自分の保育実践を振り返ります。その際に大事になるのが「一人ひとりの良さと可能性は引き出すことができたかな」「子どもの心情・意欲・取り組む姿はどうだったかな」を自己評価しなければなりません。そこで今回は付箋を使い、自分だけの視点がこだわりになっていないか確かめて、他の保育者の視点も加えて自己評価基準を上げる試みを行ってみました。このような子どもの姿の共有をするときはポートフォリオなどを使うととても役に立ちます。『A (action) 改善する』は、新たな見通しを立て、次の保育につなげることです。振り返りが豊かになると、この後の保育しようとする想定や子どもの可能性がより広がるのではないかと考えました。

結果、参加者の皆さんの記述を見ると子ども理解が深まり、他の保育者の意見と同じ時は自信を持つ姿が見られました。

## 表現する子どもの保育者の関わり方

保育者の皆さんは、子どもにさせたいことが活動になっていませんか。それは保育者が答えを持っている状態です。造形や絵は保育者がかかわった跡がはっきり残りやすいのです。0・1・2歳の保育で季節を織り交ぜて傘の形の台紙を渡したとします。「雨描けるかな」等いいながらクレパスを渡して子どもが描いたら、本当に雨なのでしょうか。傘の形は保育者の表現ですし、子どものイメージは全く違うかもしれません。子どもが自らしたいと思うように描かせてあげてください。それを基本にします。もしも何を描いたかわからなければ「無題」で大丈夫。とても子どもに誠実な保育です。

その代わりに、描いた日にちとその時の様子が書いてあればバッチリです。このことはポートフォリオのラーニング・ストーリー（写真の部分）とエピソード記録（子どもの声・状況）と同じ記録ですね。保育者が「人工発達」させてしまうのではなく、子どもの素朴な表現が生まれ出てくるのを喜ぶような、「自然発達」の絵を受け止めないと子どもの育ちが読み取れないのです。

子どもの絵をみて、子どもに形を求めたり、描けると説明させようとしたり、色を見て心理が気になったり、あいている空間が気になったりしませんか。大人の見方・考え方を押し付けて、子どもの心が無かったことにするのではなく、子どもの見方・考え方を楽しんでください。それが子どもの権利を保障する保育にもつながるのです。



資料 「表現研究会」アンケートより

研究会・講師名
表現研究会 永渕泰一郎先生

回収数
12

<研修効果>

経験年数	合計数	%
1年未満	0	0%
1～5年	5	42%
6～10年	4	33%
11～20年	0	0%
21年以上	3	25%

研修前		合計数	%	研修後		合計数	%
① 興味	5	7	58%	⑤ 内容理解	5	9	75%
	4	2	17%		4	2	17%
	3	3	25%		3	1	8%
	2	0	0%		2	0	0%
	1	0	0%		1	0	0%
	不明	0	0%		不明	0	0%
② 得意	5	1	8%	⑥ 応用力	5	9	75%
	4	3	25%		4	3	25%
	3	5	42%		3	0	0%
	2	3	25%		2	0	0%
	1	0	0%		1	0	0%
	不明	0	0%		不明	0	0%
③ 保育計画	5	0	0%	⑦ カリキュラム理解	5	7	58%
	4	2	17%		4	3	25%
	3	9	75%		3	1	8%
	2	1	8%		2	0	0%
	1	0	0%		1	0	0%
	不明	0	0%		不明	1	8%

学び・気づき

- ・様々なポートフォリオや動画を見て、一つのことに對して先生方と話し合ったことで、色々な角度からの視点で物事をとらえられるようになった。
- ・指導要領などを見返すこともなかったが、照らし合わせることで自分の保育の自信につながることで、不足分を補えることも学んだ。
- ・ねらいや指導内容が実際の保育にあっているのか不安だったが、捉え方を学べた。
- ・子どもがのびのびと表現できる環境づくりと声のかけ方や見守りの大切さを学んだ。
- ・子どもたちの小さなこだわりを見つけてトキメクことができるようになったことが、学びの力だと感じた。
- ・絵画が苦手だったが、保育指針に基づいたねらいや内容を見て自信にもつながった。
- ・子ども理解をしているつもりでも、保育のねらいや目標を達成させたい気持ちから、子どもの今の心情に気づいていなかったことに気づいた。
- ・大人はできあがった作品に対して見てしまうが、子どもたちは作る過程や動作を楽しんでいることに気づいた。
- ・今回、動画を撮って振り返ることで気づけた良い機会になったので、これからも保育を振り返って次へ生かすという意味をもって保育をしていきたい。

園内への普及

- ・職員と保育についてより一層話をするようにした。研修記録簿やポートフォリオを見てもらい直接伝えるようにした。
- ・どんなことでも受け入れてみる。「NO」はなしで環境や時間を作るようにした。そして研修の場で伝えられる機会があれば、実践したこと、写真や実際のものを見せながら伝えていき、ドキュメンテーションでも保護者に発信していく。